小園朝落語會

特30
395

三遊亭小圓朝は最に三遊亭小圓太と呼んだ青年落語家であつた、後金馬と稱しその技大いに進み、また小圓朝と改め、圓朝直傳の落語自ら聽くべきもの少からず、就中木編収むるものは、最も彼が得意物にして、圓朝の口吻を寫し得たる者、編中の速記もの價値あるや知るべきである。　柳亭痴楽論

[illegible]

目次

●痴話喧嘩……一
●もみぢ……一三
●くふやみ講釋……三〇
●主從の粗忽……五五
●すて子の母……六九
●多勢に無勢……一〇七
●はなむけ……一二七
●両手に花……一四二
●鉢内旅行……一七八

明治
41 7 15
内交

既刊

禽語樓落語會
柳枝落語會
圓遊落語會
桂文治落語會
圓藏落語會
圓喬落語會
左樂落語會

各冊金廿五錢○郵税四錢

小圓朝落語會

三遊亭小圓朝口演

痴話喧嘩

エー……一席申上げます小圓朝も此度は御縁があつて初御目見得の事で御坐いまいますから何か面白いものと存じますが別に面白いものも御坐りませんが何しろ何か餘り道中の遣ちん所のお話を一席申して御機嫌を伺ひま

せう……何事も縁と云ふ……縁がなければお目通りの出來るものでは御坐いません小間朝ち今回御目通りするも縁で御坐います……何事も此因縁と申します尤も、因縁の深いものは親子主從に夫婦で御坐いますが主從は三世夫婦は二世親子は一世なぞと云ふ事で御坐います其の内に此夫婦の縁計りは何うも不思議なもので御坐いまして見ず知らずの他人と他人が一所へ寄つて夫婦になるので小い中に　男「彼の人を女房にしやう　女「彼の人を亭主にしやう……。と云ふ心は有りません御成長に從て不圖縁が有つて夫婦になるので……東京の人でも御夫婦の縁で有りますから長崎の人と夫婦になる又肥後の熊本の人と甲州の人と夫婦になる夫りや分らんもので御

坐います已に斯んなつまらん所の衣物を拵へて着ましても何で御坐います表が有つて裏がなければ一枚の着物が出來ませんが表が旦那様で裏は細君ですから折目正しく行けば何日でも御夫婦で御坐います……是れが逐には旦那が浮氣の染を付けると細君が悋氣の燒穴を明けると着て居られ無いから此裏を取つて外の裏にする是れが再縁で甚だ宜しくない事で御坐います表は縮緬何所で出來たと云ふに縮緬は西京裏は青梅飯野で出來た絹で餘程國が離れて居りますけれども縁で御坐ますから夫婦に一つ所へ纏る下着は琉球紬沖縄縣矢張り國は離れて居ります帯は筑前博多羽織は南部で奮生羽織は八丈帽子は獨逸で出來て靴は佛蘭西で西津合併して居ります其所で

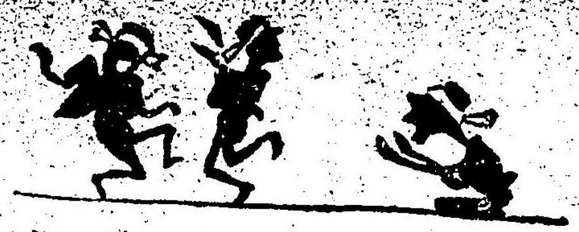
見合

揮毫が越中で御坐ります……縁と云ふものは不思議なもので其の縁に御縁の深い御親密な夫婦がつまらん事から喧嘩致します是りや考へて見ますと上等社會御客様の様な方には夫婦喧嘩は無からうと思ひますなせなければ御人品が調のつて居ります……れ宅なぞも御廣う御坐いますから御居間寝間食堂應接間夫りやもー……何うも殿様と奥様とお居間が違つて居りますす我々共はお居間にもお寝間にもたつた畳が三畳半か無い二六時中顔と顔見合つて居りますから喧嘩をおつぱじめますが俗に夫婦喧嘩は犬も食はぬと申しますが夜るが夜半でも構は無い喧嘩始めまして　夫「冗談ぢやア無いなお前の様に愚圖〳〵枕元で言つてちや法がつかないぢや無いか……何

うしたのだよ……眠くて仕様が無いぢやア無いか……寝かして呉んねへ

女「寝かすも寝かさ無いも無い餘りだお前様昨夕何所へ行つたのだへ……

夫「何を云ふのだへ……　女「何を言ふつたつてかを言ふつたつてお前様……お前様昨夕も一昨日の晩げへも歸ら無いでグウグウ鼾かいて寝るから愚圖〳〵言ふべろ……　夫「鼾かくつて他へ交際で行つて徹夜したのだよ前愚圖〳〵言ふ事あるめへ……　女「お前様と同志になる時お前様と一緒に東京へ行くげれども乃公東京には親類も無いがお前様は東京ものぢやないけれど親戚も親類もあるだらうけれど私はなんにも無へのだから見捨て無ければと言つたら見捨て無いからと云ふから同志になつたのだ　夫「見

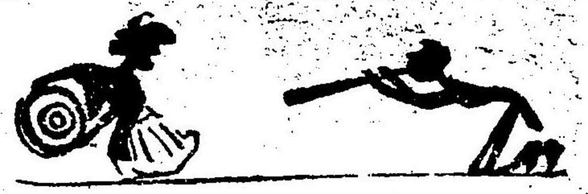


捨てるとも見捨て無いとも言は無いぢや無いか　女「夫れだつてお前様二晩何所へ行つた女の子の所へ行つたらう女の子の方でせぶつて家へ歸つてグウシ〳〵……鼾かいて寢られちや心持ちが惡いから言ふべエぢや無いか夫「然んな事ぢや無いや分ら無いな……　女「然んな事ぢや無いつて事あるものか……　夫「手前の樣な分ら無い奴は無いや……嫌になつて仕舞は女「嫌になつて仕舞ふと……（大聲）　夫「夜が更けて居る靜にしろ　女「此位ゐは小い〻もつと大い聲するぞ……　夫「斯ん畜生……（打つ見得）……女「打ちやがつたな……頭叩いたな……　夫「分ら無い事云ふから打つたのだ……　女「然んな事云ふとおつちんで仕舞ふぞ……　夫「死んで仕舞

へ……　女「死んで仕舞ふと……首吊るぞ……　夫「勝手にしろ　女「身を投げて死んで仕舞ふぞ……　夫「死んで仕舞へ……　巡「オイ……開け無いか……此所を開け無いか……　夫「表を叩いて居らあ……何誰でありますか締りがありませんから直ぐと開きますが……大變だ巡査さんだ……だから大きい聲するなと云ふのだ……　巡「大分騒しい樣だが何事だ……夫「何でも無いのでくだら無い事で……　巡「くだら無いと云ふ事があるか……　夫「エーツ……今ズー……となんしたので御坐まいす……　巡「オイ〳〵今此前を通ると大聲を發して死んで仕舞へ〳〵深更で死ぬとか死ぬとか云ふは穏かならん言葉では無いか……　夫「畜生

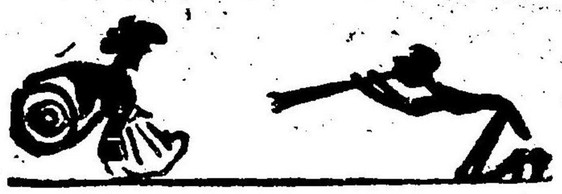
奴大きな聲をするから斯んな事にならあ……　女「お前さんから云ふから私が云ふのだ……　夫「乃公が譯を言つて居るのに……　女「お前樣が……

巡「オイ〳〵そうどうも互ひに爭つては困るぢや無いか靜にしろ……何う云ふ譯で爭そうだね……お前方夫婦だね……　夫「夫婦で御坐います……左樣で御坐います……　巡「夫婦ぢやア大分言葉が違ふがお前は東京だが……お前は他縣だね……　夫「矢張り此方と一緒の國です私も東京のものぢや無いのです……　巡「お前は寄留でもあるかね……　夫「桐生では無いので……　巡「國を問ふたのでは無いお前は寄留かと問ふのだ……　夫「然んなもので御坐いませう……　巡「何んだ……源籍は何所だ……　夫「

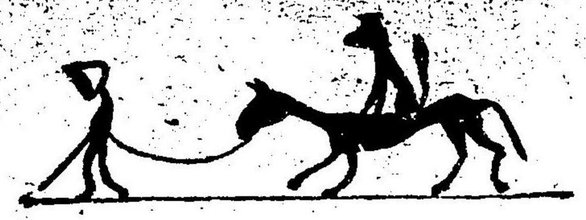


へエー……　巡「お前の原籍は何所だへ　夫「東京に居ますが源助の所は巡「分ら無いなお前の國は何所だへ……　夫「私はなんで御坐います……下總で御坐いまして……　巡「下總は何所だへ……（此時手帳へ書留られる見附）　夫「へエー……お書きなさるのは何うか御勘辨を……　巡「お前の國を書き取るのだ……　夫「夫れを何うか……　巡「下總は何所だよ夫「へエー……下總は銚子で御坐いまして……　巡「銚子は何所だへ……夫「觀音前で……　巡「名前は何と云ふ……　夫「吉田忠助……　巡「何才だ……　夫「廿五で御坐います……　巡「何商賣だ……　夫「職人で御坐います……　巡「職は何だ……　夫「大工で御坐います……　巡「大工

か……お前は何所だへ……　女「ヒヤ……　巡「お前は何所だへ　女「私は下總です……　巡「下總は銚子か……　女「佐原です……　巡「佐原は何所だへ　女「橋本です　巡「橋本と云ふ所か……名は何と云ふ　女「田中鉄と言ひます……　巡「何歳だ……　女「二十ですよ……　巡「二十歳か……お前は長女か……　女「ハー……　巡「お前は長女か……　女「夫りやもし宜い……何うでも宜い寢る前に小便はした……　巡「お前は長女か姉か兄でもあるか無いかと言ふのだ分ら無いな……　女「長女だよ……巡「女子の是れで樣子を見ると夫婦となつて此東京へ出て來たのか　夫「面目ないんで御坐います銚子に居りましたが佐原へ仕事に行きまして是れ



の伯母が心安いから泊つて居りまして仕事に出掛けたので……何で御坐います此奴がチヨイ〳〵辨當や何か詰めて呉れますから氣の毒だと申ますと此奴の言ふには何うも……氣の毒の事は無いお前さんの辨當をチヨイ〳〵つめるのも樂みだつて申しますから私ちも萬更でも無いもので御坐いますから乃公の樣なものにでも一緒になつてと言ひましたらお前さんと夫婦になるのは願つたり叶つたりだ……つて……　巡「嫌な聲をするな……然……云ふ事なら萬更の事ぢや無アいか住み慣れた國を出て知らん東京へ來て夫婦になつて居るのぢや中能くしなければならん歸る時は故郷へ飾る錦立派になつて歸らなければならん……夜も更けて居る互ひに大聲を發しては



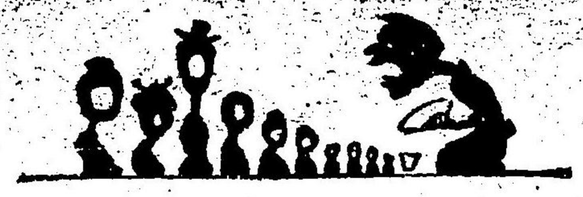
不可れ前方大聲を發しては皆此壁一重が他人か住んで居るのだから他のものが迷惑する……眠る事が出來ないと明朝の業に差支へるのだ……　夫「ま……何うも何うか御勘辨を……　巡「お前さん方が大聲を發しては夜更けて居るから誠に困る……此後もある事だが氣を附けなさい……　夫「あり難う御坐います色々御厄介樣になりまして……　巡「是れからなるたけ夫婦喧嘩しないで……　夫「色々御厄介に……　巡「もー……宜しい……分つたかへ……　夫「分りました……　巡「分つたら夫れで宜いから戸閉りして寢て仕舞ひなさい……　女「たが私の頭二つ打つて死んで仕舞へつてあんまりぢや無いか何うか片附けて貰ふ……　夫「片附け無くとも言い

私が歸つたら締りを能くして寢て仕舞ひなさい寢て仕舞へば……分ら無い女子だな……　女「お前樣寢れば中がなほりますが中が……　巡「なほらん事は無いよ今聞けばお前は佐原で亭主は銚子ぢや無いか何方も下總と下總だから……根を洗つたらお互ひに千葉縣下(痴話喧嘩)では無いか。」

もみぢ

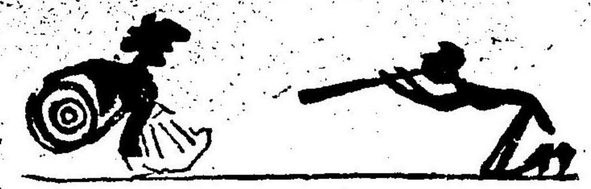
エー一席申し上げます、能く陰氣陽氣といふものは、何にでもあるもので月に陰陽が御坐います、暮が大層陽のやうだが、暮の月が陰でございます春になると此れが陽に代ると申します……春は追〳〵に梅が咲きまするとか、又は櫻になりまするとと、大層見物人が出ます……雪月花と申しますが其のうちで一番花が宜しいやうに思ひます……マア櫻時なぞは御婦人が赤い顔をして歩行いても、見ツともなくないやうでございます、知らんお方と盃の獻酬をするなぞといふことは、花時でなければございません、嬢さ

ん方は赤い腰巻を出して、花の下を歩行き、誠とに美くしいもので、此方では重詰を食しあがる、瓢亭の御酒を食しあがる、食しあがるものも、花の咲きました下で食しあがるてへのは、別に美味いさうでございます……デげすから食しあがるものが、はなの下で無ければ成らんてへことを申します……マ秋は春と違ひまして、何となく物寂しう成りまするが、又た落ち着きといふものが、秋が一番落ちつくやうでございます……先づお茶を召しあがッても、風呂名殘り、爐開き、實とに種々目が代りまして、大層なお樂しみでございます……又た風流人なぞは、秋になると「野がけは何うでらふ」なぞといふことを催ほします、樹々の梢も紅葉する、紅葉とい



へば先づ瀧の川、其の昔しは大層眞間が宜しうございました、故跡もありまして、國分寺を見物して、紅葉を見て歸らふといふ催ほしで、二人連れで市川の渡船を渡り、ポク〳〵歩行いて參りますが　○「何うも今日は、大變に暖たかだおア……十月の、頃九月ッしッて、小春凪で、今日は眞とに快い日だ……ヤア貴君と兩人で斯うやッて、彌治喜多で、諄らんことを言ッて、ヤア歩行くなア、此れが樂しみだ……ダガ何だッけ、斯うやッて朋友の中でも、別に仲よくしてゐるが、貴君の年齢を、己らア眞實に知らないてヘナ訝しいが、貴君は何歳だね　△「己れの年なんざア、聞かなくッても宜い、お前から思へば、己れの方がズッと兄きだ　○「夫りやアお

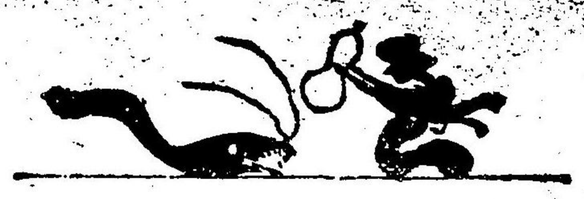
前の方が兄きサ……兄きだがお前何歳だエ　△「己れはモウ四十よ　○「四十だエ……己らア最う五十越してゐると思ッた　△「巫山戯ちやア可ねエ、其んなに胸隔が含んぢまッちやアゐねへが……　○「ダけれどサ、お前の頭上は馬鹿に禿げちまッたねエ……前から見れば全で坊主だ、背後に少しばかり、散髪があるばかりだ……前坊主の背後散髪、頭上ア其んなに禿てるから、何うしても年齢は上に見えるねエ　△「お前ヤア、年齢が何の斯のといふけれど、今あとの市川の渡船でも……アノ夫れ乘り合ひになッた、年のころは漸やく二十……先づ四五だねエ……クッキリ色の白い、御新造と下女と兩人で乘ッてたらふ　○「然う〳〵、夫れは己れは能く知



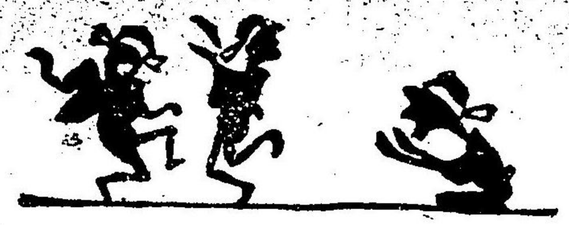
ッてらア……夫れが何うしたんだ　△「何うしたといふけれど、アノ御新造てへものは、己れに充分思し召しがあるせ……　○「虚言を吐きねエ……初めて遇ッて、況てお前の其んな頭上の禿たのを何ぼ物好きでも、思ひをかけるなんてへことが有るものか　△「イエ然うでねエ……眼がねエ、己れの方を始終斯ハ見詰めてねた……氣があれば、眼も口ほどに無を言ふ最うチャンと思し召しが分ッてゐるんだ……先方は先きへ上ッたらふ、此方は道連れになッて、誤魔かして話しの一つも爲やうと思ふと、お前がアノ團子茶屋へ這入ッて、團子なぞを食ッてゐるうちに、トウ〳〵見失なッてしまッた　○「お前は然う、己惚れが強いから可ねエ……先方で此方を

見れば、お前に氣があるんぢやアねエ、己れの方に氣があるに違へねエ、△「何故　○「何故ッたッて、お前より己れの方が、年齢が若へぢやねへか……頭上だッて、此の通り滿足ぢやアねへか……何ッから考げへたッて己れの方ぢやアねへか　△「イヽエ、然うでないよ、己れに氣があるんだよ。」ト互ひに話しをしてをりまするとと、背後の方から　○「もしお兩人さん、一寸とお待ち下さいまし　○「オイ〳〵、女の聲で、待て〳〵と呼んでるせ　○「何だらふ……ア、向ふから女が駈け出して來たせ　○「先刻船で相乘りになッた、彼の御新造のとこの女中が來たせ　△「成るほど、駈け出して來た　女「暫らくお待ち下さいませ　△「大層駈け出してお出

でなすッた、何か御用で御坐いますか　女「ハイ、貴君さま方は、只今渡船の中で、御同船をなすッたお方で御坐いますか　△「エー、然やうでございます　○「實は手前の主人が、此の跡の茶見世にをりますが、一寸お目にかゝりたいんでございますが、お出で下さることは出來ませんか、△「何で御坐いますか……彼の御新造が、來てくれと仰しやるんでございますか　女「ハイ、然やうでございます　△「両人、此處に居りますが、兩人で參るんでございますか、又たは一人で御坐いますか　女「然やうで御坐います、船の中でお話しをして入らッしやいましたが、貴君が彼の……元さんと仰しやいますか　△「エー、私しが元吉と申します……此處に



ゐるのが、此りや金藏と申します　女「然うで御坐まいますか、其の元さんと仰しやるお方に、願ひたいのでございます　女「然うで御坐いませうナ……一人で私に來いと、御新造さんが仰しやッたんでせう……オイ〳〵夫れ見ねエ……エー已れの言ふ通りぢやアねへか……實に夫れが以心傳心で……先方でソレ已れに來いてへんだ……此れから已れア、茶見世へ引返すから、貴君アマア一人で、眞間の紅葉を見て來てくれたまへ……已れア此れから、御新造さんのどこへ行ッて、種々話しをしたり、又た聞いたりするんだから、誠に御氣の毒樣ですが、お前一人で行ッて呉んねエ　金「ダガねエ、お前はねエ、何かへ……一人で彼の御新造のところへ行ッて、

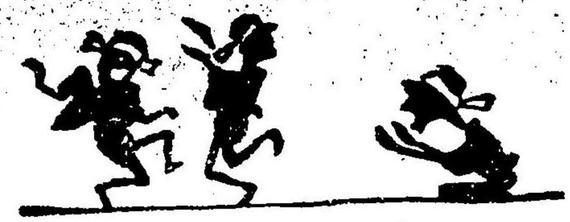


已れを追ッ投りださうてへのか　元「然ういふわけじやア無いんだよ……先方で、一人で來てくれろッてへんだものを　金「然うサ、お前は好男子サ……ダガねエ、今日はねエ、私の方から頼んだんぢやアないよ……お前が已れの家へ出て來て、是非今日は、眞間へ紅葉を見に行くから、同行ッてくれろといふから、已れは厭忌だけれど、お前に同行ッて來たんぢやアねへか……途中でもッて、見ず知らずの女に頼まれたからッて、朋友を振り捨てるてへなア、お前、義務を知らねへナ……宜いよ……お前が行くならお出で、已れア紅葉を見ねエ……已アお前の跡を尾行てくよ　元「夫りや困るよ……ヨお前、お願ひだから、此處は退ッて呉んねエ……跡で御馳

走をすらア　金「御馳走なんざア否やだ……お前が一緒に、紅葉を見に行くなら良し……お前が一人で、彼の御新造のとこへ行くなら、已らア邪魔に尾行てかう、已らア何でも否やだ、女「モシ〳〵妾しがお願ひ申しましてお朋友衆が、喧嘩をなさるやうなこッては誠とに相濟みません……何うか御迷惑でなければ、お両人さんで入らッしやッて下さい、　金「ヤ參りますとも、參りますとも……何處までいも尾行て行きます、　元「困ッたなア何うも貴君は賢助で困る、　金「何うせ賢助だい、　女「何うか其んなことを仰しやらないで、何うぞ御一緒に願ひますト爰で三人で、跡の茶見世へ送ッて參りまして、此の茶見世の奥に御新造といふのが待つて

をります。女「誠とに恐れ入りますが金さんてへお方は、其處に一寸とお待ちを願ひます……一寸と元さんてへお方、此方へお這入り下さいまし元「金的、お前其處に待ツてゐねへ、金「何うせお邪魔ですから何うかお早く願ひます、女「さア何うぞ此方へ、元「彼奴は何時までも彼處に、待たしておいても宜いんです何ういふ御用で御坐いますか、女「ハイ外のことではございません、此の屏風のうちに主人は臥ッてをります……貴君に折り入つてお願ひ申さなければ成らないことがございます否やだと仰しやいますと、主人にも面目なし妾くしも主人に申しわけがございません……何うか助けると思しめして、御無理のお願ひでございますが何

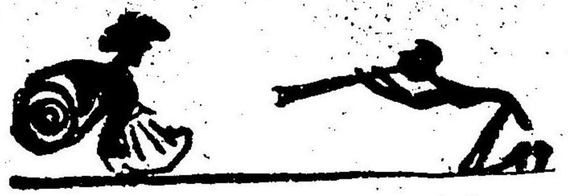
ことか存じませんが、モウ彼の御新造さんの仰しやることなら、何でも承知ます、エー私の一命でも何でも與れろと仰しやりやア、進げます　女「まことに有りがたう存じます、其のお言葉を伺がまして、安心いたしました……然やうなら申し上げます、手前の主人は、大の癪持ちでございます癪が發りますと、人の見さかひも無いので、今日は工合も宜しいだらふと出かけて參りますと、急に癪氣がございまして、途中ではございますし、何ういたさうかと、手前も途方に呉れまして、此の茶見世の奥を借りましたのでございます、勿〳〵急には治まりません、頓と合薬てへものがございません、只だ不思議なことには、癪の發りさするごとに、お宅にござい



まする藥罐をば嘗めますると直ぐに癪氣が治まります、此家で只今藥罐を借りやうと思ひましたが、頓と其の藥罐がないと申します、夫れゆゑ誠と に當惑いたしました、デ、アノ……失禮ではございますが、最前渡船の中で、貴君さまのお頭上を拜見いたしますると、全で手前のところの……藥罐に其儘でございます、デ、何うか貴君のお頭上を、主人に嘗めさしたらば癪も治まることだらふと、斯う心得ましまして御無理のお願ひを致します、何うかお頭上を、嘗めさして頂だきたいものでございます　元「何で御坐いますエ……私しの頭上を嘗めさしてくれツてへんでございますか、驚ろいたなア此りやア……私しは未だ生れて、頭上を嘗められたことはございま

ません、何うか平に御免を蒙ふります　女「其んなことを仰しやいまして は、只今のお言葉とは違ふではございませんか、何うか人助けでございま すから、お嘗めさせなすツて下さいまし。」外に待ッてた金藏が此れを聞い て　金「ハヽヽヽ、アー有りがたい〳〵〳〵……其んなことだらふと思ッ た……何ぼ物好きだと言ッたッて、何うも不思議だと思ッた、其の話しを 聞いたんで、胸が晴〳〵した、有りがたい〳〵〳〵オイ〳〵……澤山と嘗 めて貰ひねへよ　元「馬鹿にするない……誠とに困ッたなア　女「た困り でございませうげれど、何うか　元「おやア、た願ひでございますから、 一寸と嘗めて下さいまし　女「長こまりました……有りがたうございます

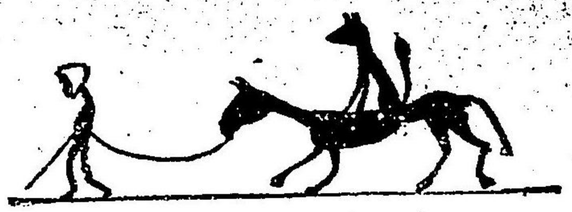
……サア御新造さま、此方へ入らッしやいまし。」女中が手を取ります、御新造が這ひ出して參りました、元吉は頭上を出します、其の御新造が、ペロ〳〵嘗め出しました　元「何うも心もちが惡いなア、生暖たかで……何うです、此處らで癒りませんかなア。」御新造は一心に嘗めましたが、眞物と違ひまして、幾ら嘗めても癒が治まりません、終には強く刺しこんで參りました、苦しいから思はず、元吉の頭上をガリ〳〵と嚙りました　元「アー痛て、、……酷いことをなさいますナ……嘗める約束をいたしましたが嚙られる約束はいたしません……オイ〳〵金的、己れの頭上ア、何うか成りやアしねへか、一寸いと見てくんねへよウ、金「オヽ〳〵大變〳〵……



……何うも血だらけになッちまッた、アー是れで己らア氣が濟んだ　元「此ん畜生、人の憂ひを悅こびやアがッて、何でお前の氣が濟むんだよ　金「濟むとも……眞間へ行かねへ代りに、お前の頭上のもみぢを見たからサ。」

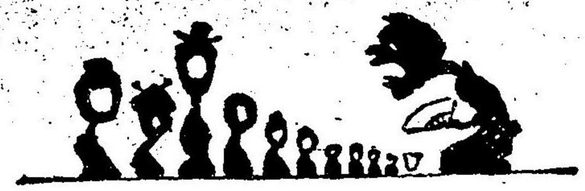
嘘講釋

エー一席申し上げます、虚偽といふことは大層悪い、盗賊の初まりだといふことを申します……私しの考がへには、虚偽が無いと大きに困るだらうと思ひます……眞實ばかりだと容子の悪いことがございます……世の中は見渡したところが虚偽ばかりのやうで、過般も伯知先生が、虚偽の世の中と穿ッてお出しになりましたが、成るほど彼の如くで……甚だしくなると虚偽と虚偽が鉢合せをするやうなことがある……眞實は親公さんが子を思ふといふ、御親子の間だぐらゐなものでございませう……然れど虚偽も名



が異ると大層なもんでございます……寺院方の方では方便と申します、軍人社會の方では、智謀計畧、傾城の手練手管、商人の元直かぎり、皆な虚偽でございます……此れが無いと大きに困ります……商ひをしますにも、

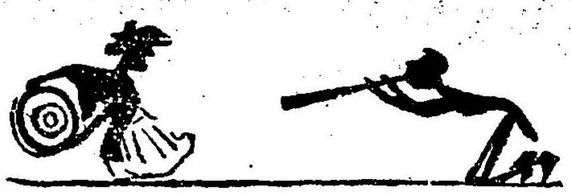
○「此りやア最う實に元直が切れまする。」客の方でも　客　お負けな、毎でもお前んとこで買ふのだから……○」此りヤア買ッたことの無い人で、此れが客の虚偽でございます……スルト商人の方でも　商「損がいくんですが、負けて置きまする。」買ふ人が大層宜い心持で、廉價ものを買ッたと思ひます……然れどギリ〳〵元帳を調べて見ると、餘ほど儲かッてをるんでございます……正直なのが宜いと申して、是れを眞實にやッたらば、工合



が惡いんで　商「宜しうございます、負けときます……此りヤア元直が何程で、何程利益ッてをります。」ト客の前で言ッたらば、誰れも買ふ者はございません……是れが商賣の氣轉で、

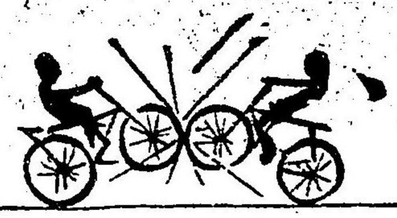
「商人の損と元直で土藏を建て」

てへことが言ッてございますが……又た喧嘩があッたとき、調停人といふ者が、彼れは妙なもんでございます……眞實の事を言ッたら、決して納まりが付くもんヂャアございません、猛りたッて怒ッてる所へ行ッて　○「お前さんの言ふことは御尤ともで、先方が惡いので御坐います……先方でもッて濟まないから、何うか謝ると申してをりますから、堪辨してやッて下



さいまし。」斯う申しまするとき　△「先方でもッて謝るなら、私の方でも堪辨しませう。」ト爰で調停人が相手の方へ參りまして、同じやうなことを申します　○「先方でも謝ると申しましたから、堪辨して下さい。」斯う虛僞を吐いて物を纏めるんでございます……ふテ見ますると、虛僞は必用なもんで、虛僞といふ文字は、人扁に爲といふ字を書いて僞と讀ませます……人の爲めに虛僞を吐くとか、夫れに世辭といふことがある、此れがないと人と交際が出來ません……心にも無いことを言ふのでございますから、虛僞といふ者は妙なもので、言はれた人が惡い心がしない、眞實をいふと喧嘩を致さなければ成りません……何うしても世辭がないと困る者で、其中

にも藝人なぞは、何更ら世辭は必用でございます……お客さまへ對しましても、世辭の宜い藝人は、餘計御贔負にあづかります……手前なぞは世辭がございませんから、大層損でございます……御贔負のお客さまが　○「お前だッて藝人ヂャアないか、少しお世辭を言ッたら宜からふ。能くお叱言を申されます、夫れは性質で何うも致方が御坐いません……年分の内には餘ほどの損が御坐います……是れは某講釋師の先生が、世辭がないために定連に憎まれました　○「餘まり彼奴ア大面すぎるヂャアねへか、癪に障るヂャアねへか……然う〳〵、彼んな嫌な奴はねエ……己れが此の間だ途中で會ッた時、藝人に世辭は入らねエけれど、面ア見て知ッてゐるから

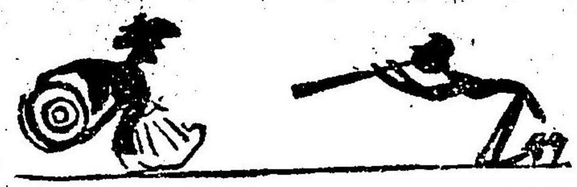


……先生、只今お出掛けかねエ、斯ういふと、オヤ御定連さまですかと、頭を上へ上ヤアがッた……返答をするに、低るのが當然だ、勃起シヤアがッた頭を……馬鹿にしてゐやアがらア　△「ウム手前の話しが出るから、己れも言ふけれど、彼奴ヂャア極癪に障ッたことがある……此間の晩退屈だから、講釋を聞に行ッた、眠いから前でトロリと眠たんだ……スルト中賣の奴が己れを起して、お茶をお飲んなせいと持ッて來た、其の茶を己れが飲んで眼を摩ッて見ると、マア聞いてくんねエ彼奴の言ぐさを……高坐の前で寢てゐる客がある、講釋が讀みにくい、夫れほど眠きキア、自宅へ行ッて寢てゐたら宜からう……斯う言やアがッたから、他の客が己れの面

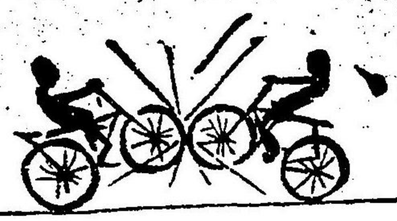
ア見るヂャアねへか、餘まり馬鹿にしてゐャアがらア　○「癪に障るねエ町内の若へ者を掴めャアがツて、其んなことを言やアがるてへことはねエ彼奴打ッちまエ　△「馬鹿ア言へ、藝人を打ッたツて致方がねエ　○「ダガなア餘まり腹が立つから、彼奴が講釋の讀めねエやうに、皆なで妨害をして遣らふヂャアねエか　△「其いつア宜からう　○「何ういふことをしたら宜からう　△「己れの考げへにャア、皆な高坐の前へ行ツて……落語家と違ツて、前に机があるから、分りャアしねエ……講釋を讀み出して肝腎なところで、胡椒の粉を買ッて持ッてッて……下でもッて、四五人揃ッて仰きあげてやらふヂャアねへか……然うしたら上で、息を出したり引たりしてゐるから、屹と胡椒の粉が、眼か口か鼻か、何ッかへ這入るだらう……胡椒が這込ッチャア堪らねエ、ピリ〳〵して、咽て嚏が出て、講釋が讀めねエ……其の中に講釋を間違る、ソコデ以て己れが高坐の前へ立ッて……先生、お前講釋は大層上手へが、己れが此の間の晩、寝てゐて聞いて濟まねへことをした、斯ういふ上手へ講釋ア聞いてゐられねエ、己ア謝る、斯う言ッて己れが立つんだ……跡から四五人揃ッて立ッたら、其の晩の講釋は無茶苦茶だ……大人氣ねエやうだが、然うして意趣を返してやらふと思ふが、何うだらう　○「其いつア宜からふ、今夜皆な揃ッて、出かけやうヂャアねへか。」爰で皆な胡椒を持ちまして、夜分になりまするこ講

釋へ參りました……ソコデ皆な高坐の前へ、ズッと陣を取りました……スルト前席の殼板が濟みまして、貳席目が濟み、替ッて先生出ました……又た講談の方は落語と違ひまして、貼扇といふものがありまして、パタ〳〵擲きます……大層權識を取りまして、容子の宜いもんでございます……最初は大きな聲は出しません……小音にいたして、お客さまを漸々前の方へ引き寄せて、夫れから少々聲を張り上げます……先づ湯呑へお湯を注いで一口飲みまして、ポン〳〵と二つ三つ貼扇を擲き、机の上へ低頭をいたしまして　講「エー偖て毎夜の御贔負さまで、有りがたい仕合せでございます……申し續きまし方る三席を辨じまして御暇を頂戴します……後坐に伺

ひつゞきに相成りましたるは、柳澤彌太郎出世のお話し……美濃守においては、大阪表へ乘り込みに相成り、淀屋辰五郎欠所に相成りまする……彌よ天下二つに分れるといふんで、井伊掃部頭出頭におよばれるといふ、大騷動のお物語り……中坐は元和三雄士、戸田勝光入道青巖の一子戸田新八郎、今一人に田宮左金吾時忠といへる、田宮流小太刀の達人、夫れに石川紋右勝貫、此の三人が辛苦をいたして、福島の家老福島彈正を讐敵と狙ふとしふた物語り……前講は德川四戰記のうち味方ヶ原のお戰ひ、内藤三左衛門三拾六段の斥候といふをお聽きに達します。」爰で湯を一口ゴックリ飲んで貼扇をたゝき立て　講「時は何日なんめり、元龜三壬申年十月十四日

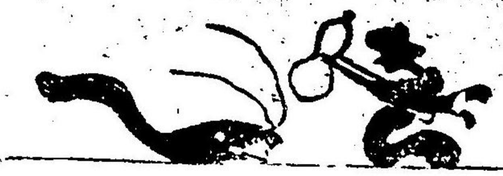


武田晴信入道信玄、其の勢三万五千餘人を引率して甲府を雷發におよび、遠州周智郡乾の城主天野宮内左衛門景連、蔦田下野守、此の兩人を案内者とし、先手山縣三郎兵衛昌景に五千餘騎をさし添へて、同國飯田、多々羅の兩城へ責めかゝる……其の勢ほひ破竹のごとく、名にあふ甲陽名代の山縣なれば、短兵急に責め立てられ、兩城忽まち落城におよんだり……夫れより信玄は兵を進め、徳川家のお味方、久野三左衛門家能が籠りたる久野の城を責め落さんと、十重二十重におッ取り圍み……嚴しく責め立つるといへども、三左衛門素より智勇の良將なれば、防戰の手配り行き屆き殊に要害宜く、勿〳〵急に落城すべくも見ゆ……是れによつて當城へは

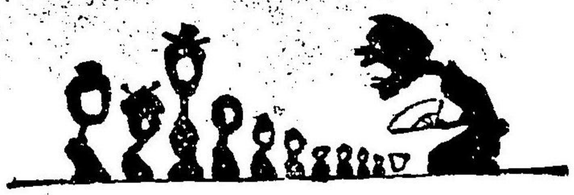


押への兵をのこし置き、夫れより在々諸所を亂暴し、農家町家を燒き立て山名郡木原、西島、袋井驛より姫子山の麓へ連綿として屯を張る……此の趣むき士地の人民は言ふまでもなく、エイトウ〳〵〳〵濱松へ、追々遠見の早馬をもつて、急を告ぐること櫛の齒を挽くがごとく　注「甲陽の信玄既に大軍を率し出張つかまつり、其の勢ほひ當りがたく候らう。」ト注進におよぶ……此の時家康公御櫓に登りたまひ、小手をかざして遙かに御覽あるに、黑烟り炎々と立ち昇り、民の苦しみ目もあてられぬ現處なり　家一イヨウ、憎くき武田勢が擾動かな、片時も捨ておきがたし。」ト急ぎ櫓を下りたまひ、俄かに諸將を召して　家「出陣の用意〳〵。」ト仰せらる、酒井

石川の面々言葉を揃へ　酒「御掟御尤ともには候らへども、敵は目にあまる大軍味方少勢にして、此れに當らんこと思ひも寄らず……先アづ暫らく御出陣をお止まりあつて、早々織田家へ御加勢をお頼みあそばされ、御籠城こそ然るべう存じ奉まつる。」トお諫め申しあげる……公憤然と御怒りあつて　家「ヤア言ひ甲斐なき者どもかな、我が領分を亂暴され、何ぞヤミ〳〵籠城いたすべきや……凡そ領主たるものは、民と共に苦しみ民と共に樂しむが天道なり……臆病者は籠城せよ、心ある者は我が供せよ。」とツカ〳〵とお玄關へお進みあつて　家「舍人、馬牽けッ　舍「ハッ。」ト牽き來る御乘馬にひらりと打ち乘り　家「心ある者は我れに續けッ。」ト只だ一騎



がけに御出馬ある、其の御軍裝は鐔木の御鎧、銀にて鍬形、金の青龍の前立物打ッたる金の六十四間の筋兜、白檀みがきの小手臑當、赤銅づくり貞宗の御太刀、藤四郎吉光の短刀を帶し、朝霞と名つけたる駿足には、金覆輪の鞍を置き、金唐艸の押し當、紅白紫三段の厚總をかけ、唐草象眼の達鎧、七五三藤〆の鞭を上げトウ〳〵と乘り出したまふ　○「スワ君の御出馬。」ト續いて大久保七郎右衛門忠世、同治右衛門忠佐、本多平八郎忠勝、内藤三左衛門信成、平岩七之助親吉等御跡に從がひ大天龍小天龍の兩河を打ち渡り揉みにもんで進まれたり（此の際家康公の思し召しは、信玄は三万餘の大軍、味方は僅かの小勢にて、迚も敵ひがたきは御存知なれども、

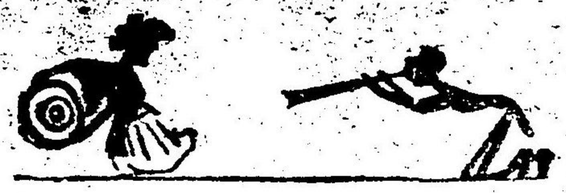


猶豫あつては彌よ信玄勢ほひに乘ずべし、敵に弱みを見せまじと、且ウハ味方の勇氣を引き立るため、斯くお乘り出しに相成つたのだ）此の時内藤三左衛門信成は、一散に馳せ拔けて君の御馬前に立ち塞がり、轡に取り縋つて　内「恐れながら申し上げたてまつる、君既に大斥候として御出馬とは申しながら、敵は古老の信玄、今大軍を率ゐ發向のところ、從がひ奉まつるお味方の人數は、餘り小勢に候らへば、此のまゝ御進みは如何ど存し候らふ、……依て暫らく此の處に御馬を止めさせたまひ、跡勢の續くを御待ちあるやう願ひたてまつる、其の間に吾儕、敵陣の動靜を見屆け、御注進申し上げん、公御聞あつて　家「尤ともなり、然らば爾、見屆けて立ち

歸れ　内「ハヽ畏こまり奉まつる。」ト御前を離れ乘り出す、信成其の日の軍裝を見てあれば、萠黃糸おどしの大鎧、草摺長に一着なし、同じ毛糸五枚錏、銀の獅嚙の前立打つたる兜には、八幡座より錏まで白熊の毛をサッと振り亂し……猩々緋に金糸をもつて下り藤の定紋を縫ひあらはしたる陣羽織を、肩に取つて投げかけ……參尺貳寸鐵づくり、備前の住祐定の陣刀を結び下げ、一尺七寸の打太刀十文字に佩び……鴻の霜降り羽をもつて矧たる尖り矢を、森のごとく背負ひ、村重籐の弓の眞つ只中を力皮に納め連錢芦毛村雲と名けたる八寸に餘れる駿足には、銀覆輪の鞍おいて、押し當尻がい紅白二段の厚總すかけ、梅花七輪すかしの達鎧、脊の撓むほどに

打ち跨がり……紺と白とのダンダラの手綱を搔い繰り、平一散に乗り出だすよと見えたるが、宛然ら颶風のおこるがごとく、電光の劇するに異ならず……砂烟り混〳〵と立ち昇り一天を覆ひ、蹄の昔トウ〳〵として、瞬たくうちに拾八町を、片手綱に繰り上げ〳〵〳〵眞ッ平地に進む……土地は名にあふ袋井畷、折りしも吹き來る姫子山の向ひ風に、兜の白熊はザワザワと逆立ちあがり、内兜より見出だす眼は爛々として明星のごとく、鬼か人かと疑がはる……三左衛門信成は一言坂の絶頂にトウ〳〵と乗り上げ馬の四足を蹈み留め、眉庇に小手をかざして、遙かに姫子山の麓に備へたる武田の陣頭眺むれば、貳千一組或ひは一千、八百、五百、三百人、此處

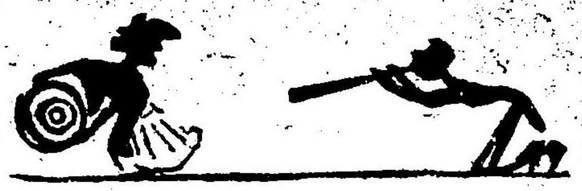
彼處八方四面に屯ろして、其の勢凡そ三万五六千、魚鱗、鶴翼、長蛇形、虎頭、圓月、箕手形、鋒矢、鴈行、一文字、眞丸、一行、モガリ落し、扨ては八門遁甲に、備へかためし有りさまは、兜の星を輝やかし、鎧の袖を搖り合せ……弓、鐵砲、鎗、薙刀、鉾、太刀等の得物〳〵を飾り立て……鎧は各々好みに任せ、黄糸、赤糸、逆澤瀉、紺糸、黒糸、桶皮胴、萠黄匂淺黄糸、白糸、青糸、ダンダラ落し、紅白二段、紫、蘇枋、雨色、錆色、翁形、胴丸、赤皮、五色糸、市松、飛白、黒白おどし、毛系の數は限りなし……定紋ついたる旗の手は、皆な眞ッ先きに押し立てたり……先づ第一陣を見てあれば、赤地に金糸をもつて正八幡大武神と現はしたる旗、へん



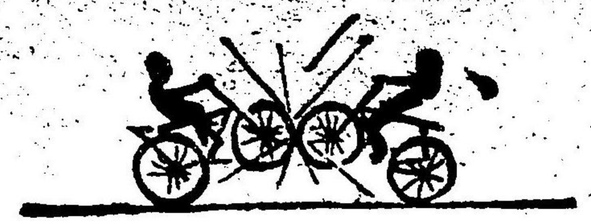
ぽんと吹き靡かせ、赤地に白く桔梗の紋を染め抜いたる旗一ト流れ、銀の二股大根狸々緋二段馬連の馬印を押し立て、旗下なる大將は、赤糸銅實の鎧、同じ毛五枚しころ、金の對鍬打つたる桃形に、金の狂ひ獅子の前立ウつたる兜を猪首に着なし、猩々緋に黒糸をもつて、武田菱を蛇腹に縫つたる陣羽織を着し、燃ゑ立つばかりの軍裝にて、赤銅づくりの太刀を佩き、金唐革の采配取つて床机にかゝり控えたり……續く同勢三千餘人、雜卒にいたるまで總て茜木綿の陣羽織、紬に一文字の合印ついたるは、是れなん甲陽名代の赤備へ、遠江國三橋の城主六万石、山形三郎兵衛昌景なり……夫れより右の方少し離れて、白地に黒く大山道段々の旗一ト流れ、銀の十

六葉の枝菊に、金の大短冊拾八枚ついたる馬印は、一層花やかに押し立つたる下に、白糸おどし銀割小實の鎧、同じ毛五枚じころ、銀獅子頭の兜を眞甲に押し頂だき、白銀づくりの太刀を結び下げ、白羅砂の陣羽織、銀切り割りの采配を携さへ大床几にかゝりたり……續く同勢三千餘人兵卒にいたるまで白木綿の陣羽織、袖に二の字の合印、此れぞ源三位兵庫頭頼政人道雷圓の後胤、甲陽にて智者の聞えある、信州槇の島の城主七万石、馬場美濃守信房なり……。此のとき高坐の前の、例の客は耳打ちをし始めまし た。○「オイ遣らうぜ……　△「宜からう、遣ツつけやう。○「ソロ〳〵嬶いでやれ、嬶いでやれ……。」一人が號令をかけまするとと、下においた胡

椒をば、各自片手に掴みまして、片手に扇をもつて、高坐を目がけて扇ぎ上げました……先生其んなことは夢にも知りませんから、彌よ調子に乗つて　講「第三陣の備へは、黒地に白く四ッ石疊みの紋ついたる旗一ト流れ銀の九曜の星、金の輪違ひ、猩々緋一段馬連の馬印を押し立て……其の下に黒糸おどしの大鎧、同じ毛五枚しころ、金の向ひ兎の前立うつたる兜を猪首に着なし、威ケ物づくり太刀を横たへ、黒（ハクショウー）……羅紗の陣羽織（ハクショウー）……黒唐革の采配は（ハクショウー）……腰なる鉄に（ハクショウー）……をさめ（ハクショウー）……鷲の（ハクショウー）……鳳（ハクショウー）……切り羽（ハクショウー）……をもつて、ハクショウー）……



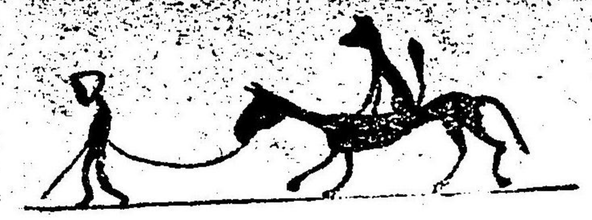
……（ハクショウー）……（ハクショウー）……（ハクショウー）……サテ何うしたんだか（ハクショウー）……樓で御坐います（ハクショウー）……是れでは（ハクショウー）……迚も（ハクショウー）……講釋は（ハクショウー）……讀めません（ハクショウー）……誠とにお氣の毒さまですが（ハクショウー）……今晩は是れで御免を蒙ふります……お氣の毒さまで御坐いますが、明晩お聽なほしを願ひますこゝで……。」トいふてへと、前の客人がヌッと起ちまして　○「何を言ふんだ、クシャン〳〵〳〵嚏をしやアがつて、頭へ唾が飛來た、間抜けめー……明日聽なほせつたつて、己ア用があつて來られねへんだ……今夜何方かの戰爭の勝負をつけろ　講「勝負はつけられませ



ん、他からコシャウが這入つたやうで御坐います。」

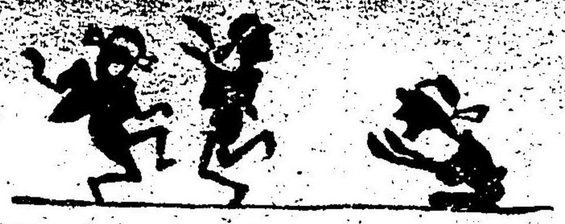
主從の粗忽

隨分粗忽かしい人が幾等も御坐いますまー……名高い粗忽の人はお釋迦の弟子で般特は自分の名を忘れたさうです内匠頭樣の家來で武林唯七是れが大の粗忽かしい人ですが吉良家へ亂入した節は大した働きをした……粗忽の人でもナカ〳〵有名な豪い人が御坐いますが私の考へには粗忽かしいからと申して十の物を十まで丸で忘れる事は御坐いませんが粗忽の人に限つて落着さが御坐いませんから何か言はうと思つてもヒョツ……と口に出ない事が御坐いますソコ〳〵して湯に行くから手拭を……と僅な事ですが粗、

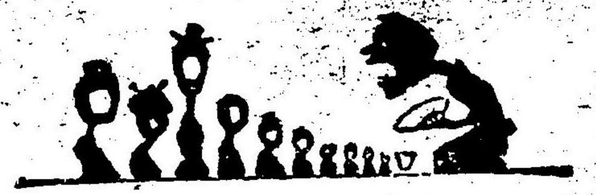


忽かしい人が私の近所にありまして　○「アノ一寸と……若し湯に行くのだが何を取つて呉れ……其所にあるナニエー……何を……夫れ雑巾を……ぢやア無い何だよ布巾を取つて呉れ……　△「エー……　○「間違つたよエー……其手拭を……。」漸く手拭に出會はすのですが骨が折れます其頃お侍士なぞは武士に二言は無いと申しますから其の粗忽かしい事が有りまして恐しい間違ひがありますが是れは去る所のお大名が殿様が何しろ粗忽かしいスルト其御家來の田中三太夫是れが極粗忽かしい人で御坐いますから間違が往々あるので御坐います　殿「三太夫……　三「ヘーエ……　殿「何うぢやね此築山の赤松ぢやが彼を何うぢやらう泉水の側に引かうと存ず

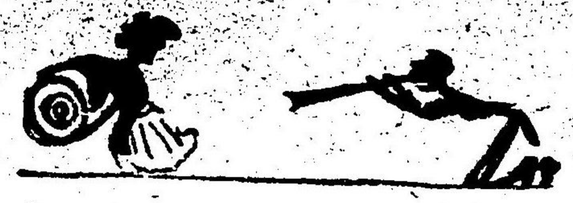
るが何うぢやらう　三「恐れながら申し上げますが彼の松は先代の御秘蔵の松で御坐いますから彼をお泉水の側に移しまして枯れます様な事が有りますと先代お殿様を枯すかと手前は心得ます　殿「松が枯れたからといつて先代を枯すと云ふ事は無いが言葉を枯すともいふ事があるから尤もだが夫れが枯るか枯ないか分らんから餅屋は餅屋とか申す夫れ何を……餅屋を呼んで聞いて見ろ……何を……植木屋を呼んで聞いて枯れんに於ては宜からう　三「夫れは宜しう御坐います　殿「私が自身に植木屋を呼ばうよ……。」と御縁端にお進みになつて　殿「是れ植木屋……。」垣を廻つて向ふの方に一群植木屋が小休みをして居りましたが　甲「何だ植木屋〳〵つて誰



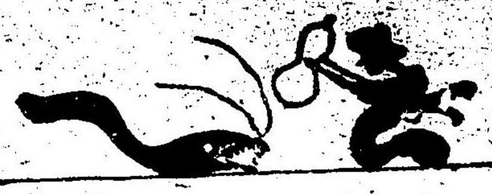
が呼んだ居るのだへ　乙「縁側に立つて居る親玉が呼んで居るのだ　甲「だから嫌になるのだ尾敷の仕事は……平身斗りして居て何だか糞八釜敷い事を云ふから……　乙「だつて後方へ親玉が立つて居て呼んで居るのだ……　甲「此間の花壇の後へ立ちやがつて植木屋お前白の牡丹をどうだらうまたまた赤い方はどうだらうと云はれた時にへエー〳〵つて時々分らないからお低頭斗りして居たが汗ばかり出で方がつかなかつた今日は誰か代りに行つて呉れ……　乙「父の代りで來て居るのだからお前が行くのだ……甲「來やがつた變挺古の奴がハー……言葉の分らない奴が來た……乃公は隠れるから　……乙「然う云ふ譯には行かないよ……　三「植木屋　乙「



エヘー！……　三「今日は染井植木屋八右衛門病氣に付其の忰が參つて居ると云ふ事だが其所に居るか　乙「へエ……オイ此方へ出ないか……　甲「驚いたな……へエ……私が八五郎で……　三「手前が八右衛門の忰八五郎か實は何か御前が御樣へならせられ直々其方達に尋ねる仔細あるとの事ちやから御前躰へ罷りはぢけろ併し御前に於て無暗に頭ムク〳〵おやかす事相ならんぞ……　八「ハー……左樣で御坐いますかへー……何を笑つて居るのだへ……　乙「言ふ事が分らないぢやないか……　八「手前乃公の身に少しなつて見ろへ……　乙「解つたかへ……　八「はぢけろと云ふのだが少も分らない……　乙「何うでも宜いからはぢけて仕舞ねへ……　八「



夫れにどたまおやかせと云ふのだ何うおやかすのだ……　乙「手前助倍だからおやかすなと云ふのだ……　八「馬鹿にするなへ……　三「何を愚論〜して居るか早速手前に尾いて御前へ罷りはぢけろ……　八「何所へでもはぢけさす……　三「粗忽ない樣にせよ……。」是れから三太夫が先に立つて植木屋が尾いて來る　三「下に居ろ……　八「吃驚した……　三「芝の土に控へろ……頭おやけて居る……　八「エー……　三「頭おやけて居る……頭が……是れ〜おやけて……　八「少とも知らねへ……へエー……　三「其所へ植木屋八右衛門の悴八五郎なるもの罷り出でまして控へました……　殿「何か夫へ出て居るのは八五郎とか近う進め　三「オイ……



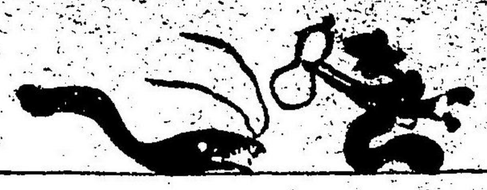
罷りはぢけろ……　八「はぢけるにも何うするにも身躰がすくんではぢけられません尻押してください……　三「怪しからん事を申すな……斯うかしい……面を上げろ……　八「へエー……。」と首を上げました　殿「何だか大分眉間が赤くなつて居るが後から押されて額を擦つたか妙なものだ……實はなんの……その築山の赤松ぢやて夫れを泉水の脇に引き度いと云ふのだが先代秘藏の松であるから若し枯る樣な事あつては先代に對して濟んが枯んに於いては引きたいが松は枯るか枯んか……　三「チャツトお受を申上げろ……直に申すな手前が取次ぐ……　殿「取次には及ばん直に申せ

三「直に申せ叮嚀に……　八「何うすると云ふのです……　三「彼の赤松を築山から泉水の所へ移して枯んかと云ふのぢや叮嚀に遣れ……　八「叮嚀に遣ります……恐れながら申し奉りますが只今お聞き申したる所のお築山様のお松様の所をお泉水様の側へお引き奉りますとお松がお泣き遊ばすか遊ばさないかと云ふ事で御坐いますが移し奉りますには其のお油糟の五升もお盛り下さつて小太い根へするめをお巻き遊ばしてお引になればお枯る氣遣ひは御坐いませんと心得るので御坐り奉りますので　殿「何だかさつぱり分らんが何だ……是れ〳〵手前が堅くるしう言ふから分らんのだから彼様致せ無禮講ぢや朋友同士で話をする様にせよ……　三「是れ苦し

う無いから友達同士話しをする様に申せ……　八「自分でも分らないのです……ぢやアざつくばらんに申します　殿「なんだざつくばらんとは……何をも……　八「此なんで御坐います松を泉水へ引いて枯るか枯れないかと云ふのですが此奴根を太く廻して油糟の五升もたごりするめで根をまいておけば枯る氣遣ひはありません……　殿「枯んか早速引け〳〵……ウイ奴だ……何か取らしたいが何か其方は何うぢやさゝは食べるか……　八「幾等植木屋だつてさゝは食べません……　殿「さゝとは酒ぢや酒は飲むか　八「酒は飲むのは通り越して浴びます……　殿「面白い奴だ植木屋大勢居るだらう……三太夫酒を取らせよ……　三「御前躰に於きましては　殿「

イヤ……苦しう無い面白い呼べ〜〜……。」是れから植木屋を呼びまして御酒をくださるスルト田中三太夫へ御小屋からお迎ひが御坐いましたので御前を下つて三太夫立ち歸つて參りましたが勤番の事で御坐いますから澤山の家來も御坐いません　家「お歸り遊ばせ……　三「取り急いで立ち歸つたが何ぢや　家「國表たら至急の飛脚で御書面が屆きました……　三「書面が屆いたか……茶を持つて來い……　家「へエー……　三「茶を持つて來んか……　家「飲んで居らしやるぢやアありませんか……　三「アー……惶て居つた……是れは不可何だかさつぱり文字が分らんぢや無いか……

家「夫れは手紙の裏で御坐います　三「イヤ……成程……氣が急いて居る



からだ……前文御用捨被下然ればお國表御殿樣お姉上樣御死去に付此段御報申上げ……殿樣御姉上樣御死去……是れは容易ならん事が出來た此度お國表の殿樣お姉樣御死去アー困つた事だ今日は植木屋を集めて御機嫌能く入らせられるにイヤ……御愁傷の事であるげれども早速申さんければならんナニオヽ……夫れナニ……　家「何で御坐います　三「夫れなんだ……上下を……。」上下を着けまして改まつて御前へ出ました　殿「アー……三太夫か　三「「へエー……　殿「なんぢや改まつて……　三「恐れながら國表より至急の飛脚が……　殿「何事か……　三「恐れながらお人拂ひを願ひます……　殿「人拂ひぢや……。」是れから植木屋は驚いて下る近臣の方

も御遠慮で御坐います　殿「心元無いなんぢや……　三「恐れながら申上げます……誠に御愁傷お察し申し奉ります……　殿「何ぢや愁傷とは……

三「實は其の國表よりの至急の飛脚で御坐いましてお國表のお殿様お姉上様御死去實に驚き入りました事で御坐います　殿「お姉上様御死去だ……

三「へエー……　殿「夫れは知らん事とは申しながら今日酒宴を催して相済ん事を……　三「へエー……御愁傷御察し申します……この上は御上屋敷へ停止を申付けます　殿「今より屋敷を静粛に致せと申せ……　三「へエー……　殿「お姉様の御死去は幾日である……　三「へエー……　殿「幾日ぢや……　三「幾日で御坐いましたか其所は取急ぎましたので能く書

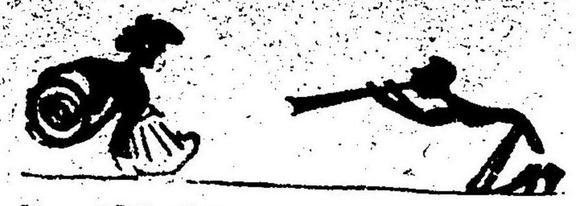
面を見ませんで分りませんが早速見て参ります……　殿「直ぐ見て参れ粗忽かしい奴だ……。」小言を聞いたから頭ボッ〳〵と逆上て戻つて來ました

家「大層お早く……　三「餘り急いで何を見なかつた……何うした　家「さつぱり分りません　三「惶るな　家「旦那様が惶てお出であります……

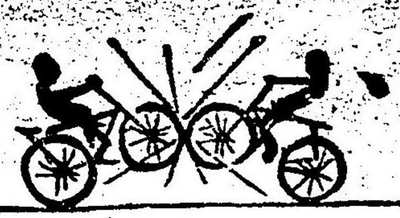
三「書面は何うした……　家「手紙は旦那様讀んでお出になりましたが……

三「彼が無い時は申譯が無い其所等を探せ……　家「御坐いません……

三「フーと嘗棚明けて見ろ……　家「何所にも御坐いません　三「是れ白痴今此所で讀んで居つたのに……怪からん奴だ……　家「夫れでも手前共は存じません……　三「アー……在つた〳〵手前の懐中に這入つて居



る是れでは探しても知れん筈だ……手前達は粗忽だな……　家「旦那様が粗忽で……　三「至急の事故前文御用捨くだされ候お國表に於て御貴殿御姉上様御死去……御貴殿御姉上様……是は大變だなイヤ……殿様では無い御貴殿と云ふのを殿様と飛でも無い間違ひをした……手前は小い折柄粗忽でならんと父様御心配なさいまして粗忽でならん〳〵と云はれたが武士が斯様な事を間違へては申譯が無い潔よく切腹致して相果る其方どもは跡に殘つて始末をして呉れ手前は潔よく切腹するから……國表でも姉上が死去なされ江戸表で戸前が切腹するとは何たる事だらう……何にを持つて來い組庖丁を取り揃へろ……　家「夫れは飛んだ間違ひで御坐いますが……

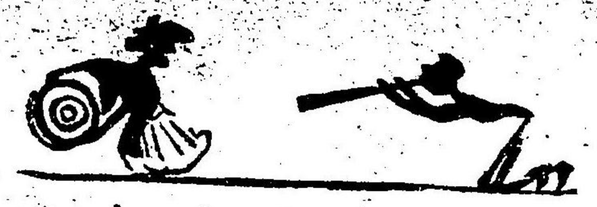


なれども旦那様無暗に急る場所ではなからうと存じます一應殿様へ申上げられて手討ちになり切腹に相成つても遲い事はなからうと存じますヒョツと百日の蟄居で生命に別號が有りませんかも知れません……旦那様お考へ遊ばせ……　三「其方の言ふ通りであるが其所までは氣が附かんかつた實に死は易く生は難し是れは其方の申す通り申上げての事に仕様……。」と再び御前へ出る時は顔の色も變りまして出でましたが進み兼て居ります御前も盃鎗として居られました　三「へエー……　殿「オー……待ち兼た近う進め……お姉様御死去は何日である……　三「飛でも無い事仕りました立ち歸つて書面をツク〳〵見ますと實は殿様のでは無く手前の姉上で殿様

の御姉上でなく御貴殿といふのを殿様と餘り取急ぎまして讀み違へて申しましたが相濟みません……　殿「何ぢや間違ひぢや……貴殿と云ふのを讀み違へた怪しからん奴だ……何うも粗忽とは言ひながら左様なことを間違へて相濟むと心得るか……　三「恐れ入りましたお手討になるとも苦しうは御坐りません……　殿「手討には致さん切腹申し付けたぞ……　三「へエー……切腹仰せ付けられて身に取つて有り難き仕合せに御坐います……殿「小屋へ立ち歸らず余が面前にて切腹をせよ……　三「ハー……　殿「ーン……待て〜〜三太夫切腹に及ばんぞ能く〜〜考へたら余に姉は無かつた……。」

捨子の母

一席申し上げます、世の中に眞實といふものは少ないもので、皆な虚言ばかりでございます、其のうちで親子といふ此りヤア虚偽のないもでございます、親子の間柄……何れへ參りましても此りヤア眞實に相違ない、其の可愛子を捨て兒をするなぞといふ、隨分恐ろしい人がございます、止むを得ない絶躰絶命といふ場合に迫ツて、然ういふことをする者がございます其の中には又た策で子供を捨てゝ、斯ういふことを爲やうといふ比ひも、隨分あるのでございます……或る酒商の見世へ這入ツて來ました人を見る



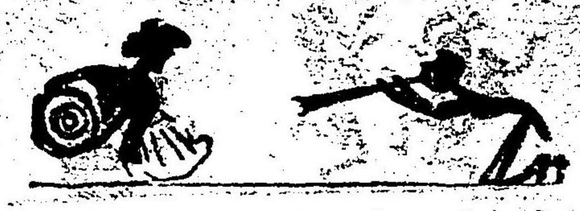
と、年のころ四十五六、懐中へ赤兒を入れまして　○「御免なさい　△「へエお出でなさい　○「少しお酒を頂だきたいので……極宜くなくッても宜いんで、大概なところを三升ばかり切手にして頂だきたうございます、△「畏てまりました……夫れでは五十八錢ぐらゐのところで宜しうございますか　○「夫れて宜うございますから濟みませんが切手にして、夫れから角樽を貸してお貰ひ申したい、直き近所ですから……　△「畏こまりました　○「未たお頼申したいのは、斯ういふ厄介ものを抱ゐてゐて、持ッてくことが出來ないんですが、お家に小僧さんでも誰人でも、手透きなお人がゐるなら、貸して下さるわけにャア行きませんか　△「畏こまりました

だ、御一緒にお届け申します……デハ此の通り三升のた切手……定や、お前旦那のお供をして、此の角樽を先方さまへ持ッてくんだ　定「畏こまりました　○「アヽ是れで宜う御坐います、此處へ代を置きます　△「有りがたう御坐います……ヂャア樽を持ッたか　○「へエ持ちました……行ッて參ります。」小僧さん角樽を擔いで跡について出掛ける　○「ヂャア御苦勞だが一緒に行ッとくんねエ……　定「ナニ些とも御苦勞ヂャアありません私しア家にゐると番頭さんが喧ましいから、お供をして外へ出るはうが餘ッぽど樂で御坐います　○「お前の處は大層繁昌するなア　定「へエ、有りがたいことに繁昌します、夫れてへが旦那さまが、何でも小寶を安くし

なくツチャア繁昌しねエッてへんで、餘所の酒店より餘ッぽど安く賣りま
す夫れですから日の沒がたなんざア、滅法急がしくッて目を眩すやうです
○「何でも商人は損をして德を取れといふ……夫れでなくッチャア可ねへ
……アノお前さんの處に子供はないねエ　定「エヽお小兒さいのは未だ御
坐いません……私しャア赤兒は好きです、お宅に出來たらお傳をしやうと
思ッてるんですが、何ういふこッたかお出來なさらねへんです、其の癖旦
那もお女房さんも欲がッてゐるんで……其のうちにもお女房さんの方はモ
ウ餘所の赤兒を見ると、直ぐと抱かしてくれッて頼んでお抱きなさるくれ
へ、何うかして子供が欲い〳〵と言ッてお出でなさるんだが出來ねエんで

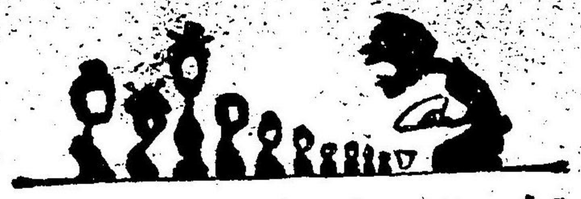
す、彼りやア授かりものだと言ひますなア……　○「欲がる方へは出來な
いもの……却ッて出來なければ宜いと思ッてる貧乏人には子供が多い、ア
ー世の中は自由にならないもんだなア……　定「アノ旦那が抱てらッシャ
る懷中の赤兒さん、溫和しう御坐いますナ、赤兒てへものは可愛いものだ
……何で御坐いますか、起てゐますか　○「スヤ〳〵寢てゐるよ　定「ア
ノ赤兒てへものは、何で御坐いますか、生れると直ぐ眼が明きますか　○「
夫リャア生れると、直ぐ眼が明く　定「へエー……何でございますか、私
しんとこの裏で生れたのは、今日で四日五日に成りますが、未だ眼が明き
ません、○「其いつア往かねへナ、お醫者に診て貰はなけりやア往かない

……全躰夫リヤア何者の子だエ　定「ナニ其リヤア、黒白斑が掃溜の傍へ産んだんで……　○「夫リヤア犬だ……犬と人間は一緒にヤア成らねエ、定「ダガ旦那、子供てへものは面白いことをいふ、可愛らしいものですナ　○「お前何か……赤兒は好きか　定「大好きです、抱て見たいんです……　○「然うか……オ小僧さん〳〵、己ア此の裏にチョイと用達をする家があるんだが、赤兒を抱いて行くのは變だ、氣の毒だがお前……少し抱いてゐて呉れねへか　定「宜う御坐います、何うぞ私しに抱かして下さい、　○「ヂヤア斯うしやう、定「へエ何うなさいます　○「夫れヂヤアお前が擔いでゐる樽を此方へ下しねエ、然うして今買ッた切手是れを樽の上へ載



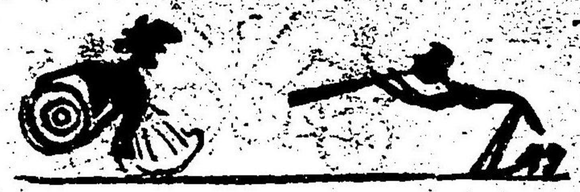
せて置くから、氣の毒だがお前……チョイとの間だから、赤兒を抱きながら番をしてゐてくんねエ　定「へエ宜しう御坐います　○「此れを其の序でに……此處へ結ひて載せて置くから　定「何です旦那、其の紙のものは……　○「先方で熨斗がついてゐねへと變に思ふから、斯う紙を結ひたのは熨斗の代りだ　定「へエ……然ういふもんですかナ、ヂヤア私しが赤兒さんをお抱き申して番をしてゐますから行つてらッしやいまし　○「夫れではお前……。」と貳拾錢銀貨を壹つ出し　○「此りヤア小遣ひにお前に遣る　定「イエ、其んなものは入りません　○「マア宜いから取ッておきねエ、出したものが引込まされるもんか、サアヨウ……　定「何うも濟みま

せんなア……赤兒を抱して貰ッて、お小遣ひまで頂だきましては……では切角の思し召しでございますから、頂だいておきます、何うも有りがたうございます　○「ヂャア抱てくんねエ　定「へエ宜しうございます　○「サア宜いか　定「抱きやうが六かしいでせうなア、始めてゞ何うやつて宜いんだか少ども分りませんが、此れで宜いんですか　○「ム、夫れで宜ひサア……然う恐く〳〵抱いてチャア往かねエ、確かり抱ねへとビク〳〵怖へるから……　定「デスが……斯う確かり押へつけたら潰れやアしませんか　○「張子ヂャアあるめへし、潰れる氣づかへはねエ……ヂャア賴むよ……定「宜しうございます。」此の人がズツト奥へ這入つて參りました、小僧も

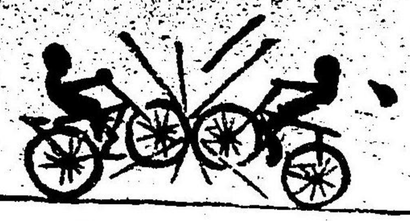


子供珍らしいから喜こんで抱いてをります、スルト、待てど暮らせど彼の人は路次へ這入ツたツきり出て來ない、暫らく經ちますうち赤兒は腹が空ツて來たかピー〳〵泣き出します　定「何うも困ッちまッた……仕やうがねへなア……モウ出て來さうなもの……何うしたらう……仕やうがねへなア……遲くなると番頭さんに叱言をくふ……仕やうがねエなア……泣くなッてーバ……泣くなよ……此方が泣きたひ……アー往けない……。」赤兒は口をモゴ〳〵遣ッて泣き立てる　定「オヽ腹が減つたのか……ダッて乳汁なんざア有りャアーしねエ……仕やうがねへなア……マア乳汁の代りに此れでも舐れ……。」唾を嘗めさした、ピシャ〳〵やり出したから　定「モッ

「背ろ〳〵。」己が口を寄せたがモウ吐き出しちまつて飲まない　定「オヽ惡味いのか……仕やうがねエなア……旦那ア〳〵……赤兒の旦那ア……。」ドン〳〵赤兒は泣く　定「ヤア大變だ……小便をした……サア大變なことになッちまつたナ……。」然處へ背後から番頭が　番「何うしたんだ定吉、定「ヤア番頭さん……　番「何してるだ……　定「何つて……何うも困つてるんです　番「困つたヂャアねエ、餘まり長へから旦那が心配しといでなさる、夫れで實は己たが見に來たんだ……サアお前は赤兒を抱いて……何うしたんだ　定「何うしたの斯うしたのッて、モウ困ッて泣きたくなッちまつたんです　番「何で又た使先きで赤兒なぞを抱いたんだ、何處のだ



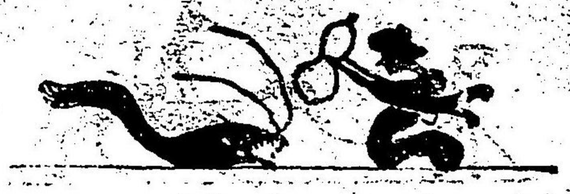
か早々と返して店へ歸んなせへ　定「夫れが番頭さん返せれねエんです、ダカラ困ッてるんです　番「何で返されねへんだ、お前の言ふことが少とも分らねエ　定「ナアニねエ、先刻の旦那が私しにチヨイとだからッて、此の兒を抱かして路次へ這入つて、夫れッきり……先刻から幾ら待ッて、も出て來ないんです　番「彼時から何時間になるんだと思ふ……馬鹿〳〵しい……何故跡から這入つて見てゐねへんだ　定「夫れネ番頭さん、此處に角樽ウ置いて切手を載せてある、其の番をしてゐる……取られチヤア成らねへと思つて……　番「困つたなア、此處は抜け裏だ、出て來ないとこを見りやア捨兒に違ひない……定吉大變なことに成ッちまッた……　定「



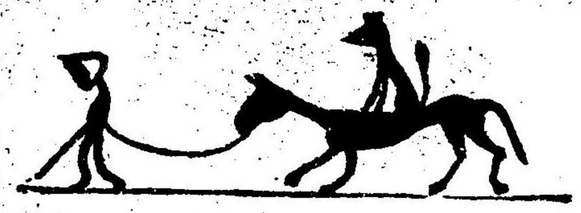
エ、……夫れヂャア捨兒を抱かされたんですか、ウワア……　番「コウ泣いたつて追ッつかねエ……皆さん面白いもんヂャアない、何うぞ行ッとくんなさい……お前が此んなことを仕出來すから人立ちがするヂャアねへか皆さん面白いもんヂャアない、何うぞ行ッとくんなさい……見ろ人立ちがして見ッともなくッて成りャアしねエ……兎も角も詮方がねエ一緒に歸れ定「ヂャア此の赤兒を投り出して行きませうか　番「馬鹿を言へ、其んなことをすりャア大變だ　定「矢ッ張り抱いてるんで　番「然うよ　定「旦那が怒ッてゐますか　番「怒ッてるとも……己れが見にくるくれへだものを……　定「怒ッてるところへ、此んなものを抱てッたら尙ほ大變だ、何

うしたら宜からふ　番「サア、何を愚圖〳〵してゐるんだ……是ウれ飛んでもねエ、お前投り出して逃げる氣か、其んなことをして見ろ大變だぞ、警官のお手にあッて暗いところへ行かなくッチャ成らねエ、夫れでなくても關りあひだ、途方もねエ……　定「オヤ、オヤ……夫れヂャア未だ抱いてく方が輕いんですか　番「當然だ……サッサと先へ立ッて行け。」番頭さん子僧を連れて角樽を提げてお見世へ歸ッて來ました　番「ヘエ、只今歸ッて參りました　主「何うした久兵衛……　番「ヘエ、餘まり定吉が長いんですから、見に參りますと、ッと此の先きに赤兒を抱いて泣いてをるんでございます、客子を見ると捨兒に違ひなからうかと思ひますんで　主「

フムー……其りや何ういふところから　久「斯ういふわけでございます、先刻赤兒を抱た方が三升の切手をお買になりまして、角樽を貸せ持ッてッて貰ひたいと仰シャいますから、子僧に持たして出しますと、途中で赤兒を子僧に預け、樽の番をして、裏へ這入ッたきり出て來ないと申すんです其の路次は抜け裏でございますから、多分棄兒に違ひないだらうと、斯う存しますんで……　旦「道理で長いと思ッた……成るほど其の話しの按排では棄兒だナ……。」奥からお女房さんも出て來て　女「何うしてマア子供を捨てるなんて……　旦「未だ何だか確かりャア分らんけれど、多分棄兒だらうと思ふのサ……　女「其の赤兒は何處に……　久「子僧が抱てるん



でございます、オイ定吉……隠れてゐたッて仕やうがねエ、此方へ這入ッて來なよ　定「ヘエ……何うも旦那さま誠とに濟みませんてとをいたしました、何うか御勘辨を……　女「チョイと定吉や、赤兒をお出し……妾しが抱う　旦「止しねエ抱くのは……何處の子だか分りもしねへものを……女「ヨウ、チョイト抱してお呉れ久兵衛　女「オヽ、イサヽ可愛兒だ、勿〳〵容貌美し……　旦「何だい久兵衛……其りャア……　久「ヘエ、ナニ其儘切手も樽に載せてございますし、外に紙が結んで矢張樽の上に載ッてをりましたから、今聞いて見ますと手紙のやうな按排……　旦「フムー手紙……何と書てあります　久「まだ讀んでは見ません　旦「夫れなら此



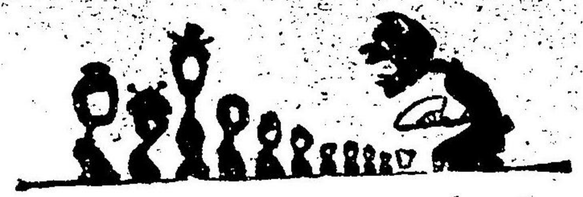
處へお見せ……。」手に取ツてつウーツと讀み下した……　旦「ウム此れは
棄兒に違ひない……此の手紙の容子で見ると、出産後母親が亡なつて、貧
乏人の手一つでは育てることが出來ないから己れに子の無いのを見込んで
何うか養育してくれろ、育ツてくれゝば店の繁昌するやうに陰で祈つてゐ
る、切手は土産の印しだと、手紙を添へて土産を置いて捨てゝいッたのだ
女「マア世の中に可愛さうな人もあるものですねエお前さん……久兵衛、
お前も知ッての通り、妾は何うかして子供を欲い〳〵と思ッても出來ない
又た然ういふ困るとこへは子供が出來る、眞實に世の中は自由にならない
んだねエ、何も功德ですからねエ旦那……事そ其の子を拾つてやッて下さ

い　旦「ダッて此んな乳呑みを……何うして育てられたもんかね　女「宜
うございます、一生懸命になつて妾しが面倒見ますからネエ、久兵衛……
然うしてお呉れ……　久「ヘエ、然うしてお遣んなされば却つて御功德……
……旦那が拾つて遣つて下されば別に面倒はございませんが只だ届けるところ
へ届けるだけで濟みます　旦「然れでも乳汁がなくつチャア困る　久「然
やうでございます、併し乳母をお抱になればお育てになられませう、ネエ
女「宜いヂャアございませんか、妾しも面倒を見ますから、乳母を置いて
下さい　旦「夫れヂャア、お前が其んなに甚く欲しがるなら、然う
しても宜いが……屹度育てるかエ　女「其りアモウ、妾しから斯うやつて

お願ひ申すくらゐでございますから、乳母の參りますまでは、乳の粉でも何でも寢る目も寢ずに丹精いたしますから……　旦「夫れからマア當家の子にするとして、誰れか雇人請宿のとこへやッて、早速乳母を遣して貰ふやうにしなけりやア、可ない……ヂャア斯うしやう、屈けや何かは久兵衛お前がやッて呉れ、外の者をやるより雇人請宿のとこへは、己れがチョッと行ッて來る。」旦那が直ぐ支度をしまして、大六天社の雀屋といふ雇人請宿へ行ッて頼んで來ると言ッて、お宅を出てお行でになりました、スルト大六天社へは參りませんで、柳橋の手前の同朋町の其の中ほどでございます、あちこち格子の箝りました粹な家、其處へ旦那は遣入りました　旦「在

宅か……　○「お出でなさいまし……旦那ですか……モウ先刻から首を長くして、姐さんがお待ち兼です……　旦「マア、跡を閉ねエ……何うしたの　○「お出でなさいまし……能く夫れでも早速……　女「旦那……お待ち申しましたんですよ、モウ何だか話しが氣がもめて、妾しか大變に心配したんでございますよ、夫れですから貴君、伯父さんにばかり頼んで……伯父さんのいふ通り、彌〳〵小さいのを抱て出て行ッたと思ひましたから、直ぐ歸ッて來て、モウ捨てゝ來たッて、夫れから妾しも跡で何うだつたかと、大變に心配して、種々氣ばかり揉んでをりましたが、何うでございます旨く往きましたか　旦「スッカリ行つた……宜い鹽梅に……夫れからアー伯父

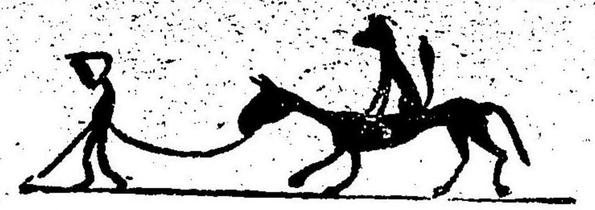
公は……　女「奥にゐるんですよ……アノ伯父さん……旦那が……　伯「入つしやいまし……大層お早うございました　旦「ヤ、今日は御苦勞だつた……マアお文スツカリ眞實に行つた、下話しの通りお前の伯父公に小見せへのを薬てさして、是れで半分落着はついたが、此れからお前が乳母に自宅く來て呉れせへすりやア、跡は何うでも話しはするから……　女「夫りやア乳母でも何でも貴郎の傍へ行れることなら、何んなことでも厭ひませんが……アノ少し……　旦「少し何だ……　女「何でもないんですけれど……實に間の悪い話しで御坐いますもの……　旦「マア其のくれへは、我慢してくれなくッチヤア行けねエ　女「ヂヤア此れからお宅へ參るんで



すか　旦「然うサ……マア何でも來て呉れさへすりやア跡はネエ……伯父さん……　伯「然うで御坐いますとも……マア私しア先刻……何うかと思ツて路次の口で見てゐますと、向ふから番頭さんが來た按排だから、此方へ來ましたが、歸ッて來てお文に種〳〵聞かれるから、モウ面倒くせへことア、昨夜から髪を乳母風に結はせる、下駄を新規に買ふ、ナカ〳〵大騒ぎをやりました……旦那直ぐお歸りですか……面倒ですから……私しが屋人請宿になッて行きませうか……　旦「飛んでもねエ……お前に來られちヤア困る……店エお前顔を出して番頭や子僧も知ッてるヂヤアねへか……　伯「オヽ、此いつア氣が利かねエ……　旦「夫れより己れが雀屋へ話しを

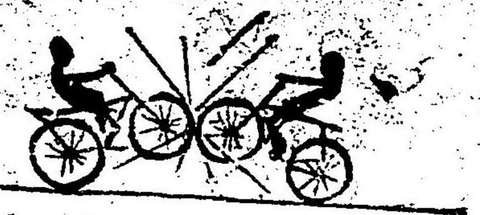
して……雀屋から連れて來りヤア……眞ものだ……雀屋の男と一緒に己れが歸つた跡から直ぐ連れ込んで貰ふ……　伯「宜しう御坐います……。」スツカリ話しをして旦那は歸つた　女「お歸んなさい……何うしました……旦「ウム、種〳〵話しをしたら、何うも持つて來い打つてつけこいふ宜い乳母やがあるんだ……ソコデ直ぐ其の者を何うかと言つて來たから……今連れてくるだらふ……　女「其れは宜う御坐いました　旦「何うだ溫和しくしてゐるか　女「ハイ漸やう只今默止したところで……馴れないもんで御坐いますから子……ナニ些とも困りヤアしませんが……此の子が可愛さうで……夫れに餘まり世間へ妾しが出ませんから、何處さまのお家で乳汁

があるか知らず、向ふ裏のお女房さん……彼處へ乳汁を貰ひにやると、生憎買物だか何だか、出て行つてゐないてへんで何うもね……夫れから漸々買ひにやつて、今乳汁の粉をやりましたら、夫れでも御方便なもんで、溫和しくなつてキウ〳〵吸て……　旦「然うか〳〵……まア其リヤア宜かつた……ダが餘まり澤山一どきに飲しチヤア可なかアないか……　女「夫れで御坐いますから……宜い加減に容子を見て、離してやりましたら宜い按排に……お腹も滿なつたと見ゐまして、スヤ〳〵寢たやうで御坐います、旦「其リヤア宜かつた　女「貴君……　旦「何だ……　女「お願ひが御坐います……　旦「お願ひとは……何ですか　女「衣類を一枚買つてやつて



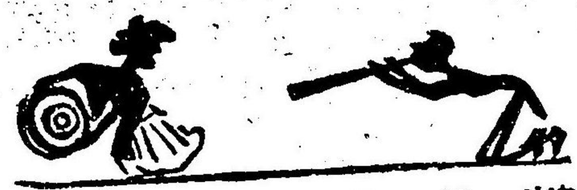
下さい　旦「夫リヤア、家の子と定リヤア、一枚なんて……拾枚でも二十枚でも買つてやります　女「イエ、今チョイと間に合せに一枚……　旦「間に合せなんて……碌なものヂャアあるまい宜いのを買つてやります、何れ呉服商へ誂らへて……　女「イエ、夫れは夫れにして、子供は敷がなくつては可ません、粗忽でもしたとき一枚ヂャア着せるものが御坐いません其儘着られるのを……幾らも出來で御坐いますから、一枚チョッと取つて參りたう御坐います　旦「ヂャア行つたら宜からふ……行くなら斯うして貰ひたい、お前が抱いてくといふかも知れないが、夫れヂャア見つともない、お清を連れてつて彼女にお抱せ、今寝てるからつて赤兒を置いてつて

跡で泣かれると困るから……　女「夫れはモウ……置いてけと仰シャッても、置いチャア往かれません……ぢやア清……一緒に行つとくれ……。」女房さん支度をして、女中に赤兒を抱かして買ひ物に往きます　旦「アノ何は……定吉はゐるか子……　久「へエ、居ります……何か御用で　旦「ア少し用があるから、テョッと奥へ來いと、然う言つとくれ……　久「畏こまりました……オイ定吉……旦那が御用があると、早く奥へ往きナ　旦「誰れだ……　定「へエ私しで……　旦「定吉か……此方へ這入んナ　定「へエ……　旦「其處ヂャア往かねへ……跡を閉めて、ズット此方へ來ナ、定「旦那さま今日は誠とに飛んでもないことを致しまして、何うか御勘弁



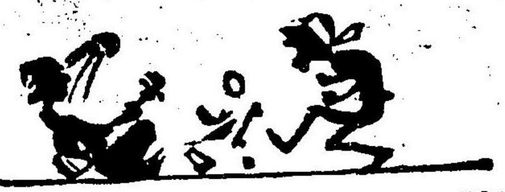
を……ナニ私しア抱きたくも何どもないのに、無理に抱てくれつて、迂濶り抱きましたばつかりで、飛んだ御迷惑を……　旦「マア其んなことは宜い、何てつたつて出來てしまつたてとは詮方がない……もつと此方へ來な……決して叱言を言ふんぢやアない……　定「……ヘエ　旦「手前確か二三度供に連れてつたな彼の柳橋の……　定「ヘエ〜、お供をして參りました　旦「ヂヤア手前……お文を知つてるか……　定「知つてるどころですか、大知りで御坐います……　旦「ナニ大知りだ……此いつア弱つたナ……其りヤア困つたなア……　定「ヘエー……何で御坐います……何がた困りなんで……　旦「默止つてろ……　定「ムヘエ……　旦「定吉……手

前は口は堅へナ……　定「ム……ヘエ……　旦「己れが言ふなと言つたことは……言はねへナ……　定「其りヤモウ……惡いといふことなら決して饒舌りヤアしません……　旦「ヒヨツとすると雇人請宿がナ……　定「ヘエ　旦「お文を乳母に連れて來るかも知れねエ……外に誰れも知つてゐるものはねエ……手前だけだ、顏を知つてるなア……決してお文……と知つて知られへつもりにナ……宜いか……　定「何でお女房さんが入らつしやるのに、此處へお文さまが……　旦「何でも宜い……乳母に來るんだ……宜いか……默止つて知らねへつもりでナ……　定「アノ乳母にお文さまがア「然うよ　定「ヂヤア旦那……先刻の赤兒は、彼りヤアお文さまの赤兒

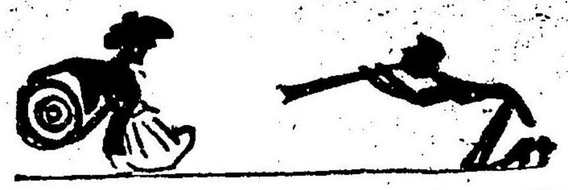


……　旦「其んなことを言ふナ……　定「アーア……然うをか……一馬鹿馬鹿しい……此方ア知らねへもんだから番頭さんに叱られ、驚ろいちまつた　旦「默止つてろ……手前にやア跡で小遣をやるから……　定「有りがたう御坐います　旦「だが手前は、彼女のことをお文さま〳〵〳〵と、何故言ふんだ　定「エー夫りャア、毎も私しが行くたんびにお小遣ひを下さる、夫れが嬉しいもんですから……ツと其の……様といツて……夫れが口癖になツちまつたんで……　旦「ダガ、乳母になツて來たとき、矢ッ張りお文さまと言はれチャア困る　定「ダツて、口癖になツてるんですから、お請合は出來ませんナ……乳母さんをお文様と言ッちャア、惡う御坐いますか

旦「惡いと言ふわけもねへが、餘まり叮嚀すぎる、お文どんと……言ふだ様と言ッチャア往けねエ　定「それがツと馴れてるんですから、口が辷つて様といふまいもんでも御坐いません……夫れだけは何うか願ひ下げに、　旦「可ません……お文さまといふと承知ません、若しお文に様をつけると裸躰で逐ひ出すよ　定「オヤ〳〵大變なことになつちまつたナ……様をつけると裸躰で逐ひ出される、宜う御坐います、然うなりャア一生懸命……決して様はつけません　旦「ヂャア最う宜いから見世へ行つてろ　定「ヘエ……　旦「これ明けつ放しにして行く奴があるか……其所を締めてけ。」子僧さんは見世へ行つてしまふ、入れ違つてガラリ　旦「誰れだ　女「只

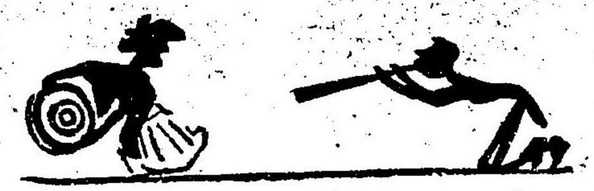


今歸つて參りました、種〳〵見ましたが何うも氣に入つたのがありません詮方が御坐いませんから間に合せに一枚買て參りました　旦「夫れで宜いワチ、何れ吳服屋へ然う言つて、氣に入つたのを取るとしやうから……誰れたへ……其處へ來たのは……　久「エー何で……雇人請宿が乳母やアさんを連れて參りました　旦「お前宜いとこへ歸つて來た……オイ〳〵雇人請宿さん……攝はねへから此處へ這入んなさい……サア攝はす此處へ這入んなさい……ヤ先刻は飛んだお邪魔をしました……何うした乳母やアさんてへナ……　雇「實は貴君がお歸りになりますと……間もなく一人お出で〻御坐いまして、お話しまするとと、別に御不自由のない方で、唯だお乳が



あるところから、呑まして置かないと跡が惡い、夫れにお乳が張ツて〳〵苦しいから子供に呑んで貰ひたいといふ……斯ういふわけで御坐いますから、決してお給金に望みがある方ではないんで……夫れから此方のお話しをすると、然ういふた宅さまなら何うか行て見たいと、斯う御當人が被仰ヤイましたゆゑ連れて參りました、何も御緣で御坐いますから、お女房さんにお目にかけて……如何で御坐いますかと一緒に連れて參りました……旦「ア、夫れヂヤア、乳母やアも一緒に連れてきたの……然うですか夫れならチョイとお前此處へ來てお吳れ、斯ういふことは私では可ない　女「た出でなさい　雇「お宅のお女さんで入ッシャいますか……毎度御贔負に

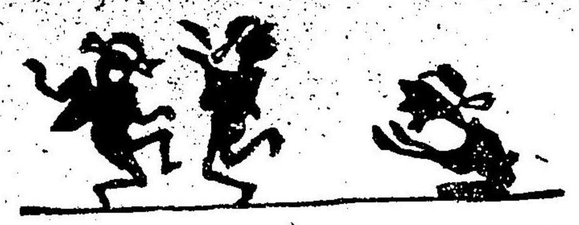
なりまして有りがたう御坐います　女「乳母ヤアを連れてきたつて……ア
ヤア遣ひませう、此處へ入れとくんなさい　雇「サア此宅のお女房さんが
お遣ひなさるつて……此方へお這入んなさい　女「サア此方へ……雇人請
宿のお前さん此方へ寄つて……サア構はないからお這入んなさい　文「御
免なさい……。」お文はお辭儀をして氣まり惡さうに、モジ〳〵してゐる、
女「始めてお目にかゝります、ハイ……妾が家内で……お前さんが乳母やア
さん……何うも妾しは何分子供を持つたことは無いんですから……アノ雇
人請宿さん、此の方が乳母やアさん……何うも美い乳母やアさん……容貌
の美いことねエ乳母やアにヤア勿體ない……旦那御覽なさい……大層美い



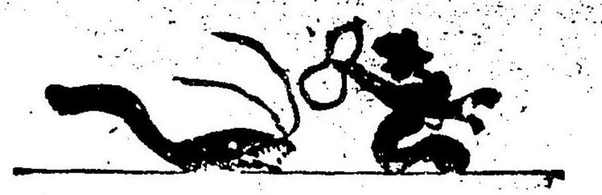
容貌ヂヤア御坐いませんか　旦「ナニ、然う美くはない、マア十人並だ、
女「何うして十人並どころですか……大層美くしい斯ういふ乳母やアてへ
ナ珍らしい……アノ然うしてお前さんは何ういふなんで乳母やアなぞに…
…ハア然ようで……縁付た先きの姑が喧ましくツて……夫れで折り合が惡
くつて……ソコデお實家へ歸るのも……フシ夫れで奉公なさる……マア夫
れは氣の毒なわけで……是れも縁づくですから……妾しは自分で持つたこ
とがないんだから、子供のことは些とも分らないんで……何うかマア他人
の子と思はないで、自分の子だと思つてねエ　雇「夫れでは御當人は宜い
といふんですが、此方も宜しいんで……　旦「ネエお前宜いんだチ　女「

モウ妾しは宜いも悪いもありません、當人がゐる氣で能く子の此の世話をさへしてくれゝば宜いんで御坐いますから　雇「夫れではお目見得に……女「ナニ目見得なぞしなくッても、直ぐと證文にしても……チエ旦那宜う御坐いませう　旦「お前せへ宜ければ、物ごと早いが宜いやうなものゝ、マア掟てだから今夜一晩は……　女「夫れでは小兒のゝ世話は、乳母やアお前にお頼申すから……何うぞ可愛がッてねエ……　文「ハイ、畏こまりました、乳がモウ張りきってをりますから何うぞ此方へ……。」お文は抱いて赤兒の顔をヂッと見て　文「お内儀さん……大層宜いお子さまで……。」瞞着かしてゐる、お女房さんには何んな容子か分らない、兎も角此の乳母

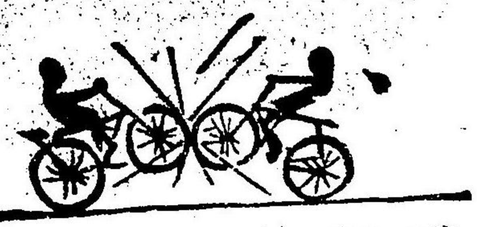
やアを置くことにして、跡で證文にすることに定めましてお文は住み込むやうになる、誠とに好い工合、お内儀さんは餘ほど恪氣深い方だが氣が付かない、スルト或る日のこと旦那が見えない、お内儀さん大層心配して、女「何處へお出でなすつたんだらふ……定吉や……チョイとお出で　定「ヘエ……何ぞ御用で……　女「アノ旦那が先刻から見ないが、何處へか入らしつたか、お前知ッてゐるのか」エ……　定「お女房さん……和女御存知で御坐いませう　女「知らないから聞くんだ子、何處だか知ッてるならお云ひ　定「奥のお土藏にお在で御坐います　女「何です奥の土藏……奥の土藏に何をしてお在だ……　定「ヘエ、奥の土藏に……お文……　女「



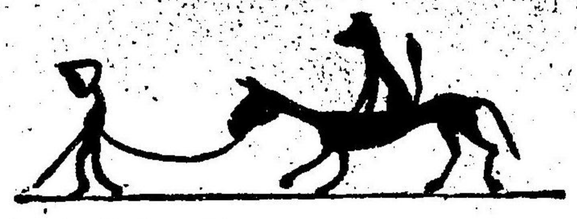
跡を言ひナ……何うしたんだエ　定「エー、お文……をよんで奥のに土藏に……　女「アノ旦那が……　定「へエ……　女「マア呆れちまふヂャアないか、何處へお出なすッたかと思つたら、奥の土藏に、何でお文をよんで……　定「何ですか私しニャア分りません　女「然うかエ、能くお前敎へてくれた、何うも少し擧動が可笑しいと思ッたが、畫日中マア呆れちまふ……宜いよ妾しが行くから……。」少しお女房さんの顏色が變ッて、ズット駈け出した、突然り土藏の網戸をガラ〳〵ッと明けて、這入ッて見ますると旦那は、お佛檀へ向ッて　旦「夫れー人間の浮生なる、相を熟〳〵觀ずるに、大凡そ敢果なきものは、此の世の始中終幼ろしのとさくなる一期



なり、然れバー、未だ万歳の人身を受けたりといふことを聞かず、一生過ぎやすし、今に至りて誰れか百年の形躰を保つべきや、我れや先き人や先き、今日とも知らず、明日とも知らず、後れ先だつ人は本の雫、末の露よりも繁しと言へり、然れバー朝には紅顏ありて、夕には白骨と成れる身なり、既に無常の風來りぬれば、即はち両つの眼忽ちに閉ぢ、一つの氣息長く絶えぬれば、紅顏むなしく變じて桃李の裝ほひを失なひぬる時は、六親眷屬あつまッて慨き哀しめども、更に其の甲斐あるべからず、扨しもあるべき事ならねばとて、野外に送りて夜半の烟りと爲し果てぬれば、只だ白骨のみぞ殘れり、哀れといふも勿〳〵愚かなり、然れバー人間の敢果な

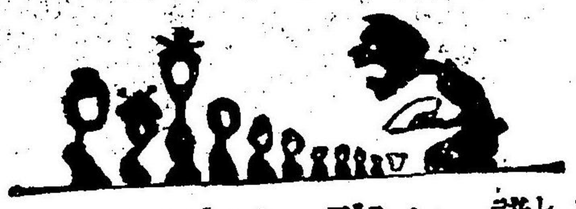


きことは老少不定の境おれバ、誰れの人も早く後生の一大事を心にかけて阿彌陀佛を深く頼み参らせて、念佛申すべきものなアり穴賢こ……　女「定吉や……　旦「アー吃驚した……何だ頭の上で……　女「チョイトお前さん、何うぞ御免なさいましよ……定吉、お前馬鹿氣たことを言ふヂャアないか……旦那はお土藏でお文をよんでるッて……此れは眞宗のお文さまといふものだよ　定「デモお文……機をつけると裸躰で逐ひ出されます。」



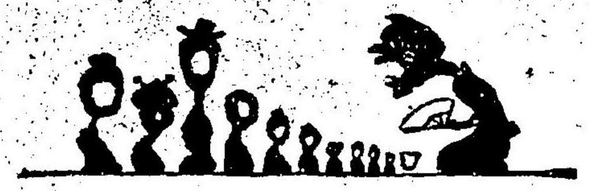
多勢に無勢

エー一席申し上げます、世の中に粗忽ッかしいといふ人は、幾人もあるもので……尋常の粗忽かしいのは、幾人もありますが、實に自分の名を忘れるなんといふ粗忽の人は、澤山ないもので……尤とも天竺にはお釋迦の弟子に、盤特といふ人が忘れたさうでございます……日本では其んな人は、澤山ないやうな按排で……此の淺野内匠頭家來に武林唯七といふ人、大層粗忽であつたといふお話しでございます……此れは盤特と唯七と合併したほどの、粗忽な人が兩人ございました……壹人は古着を露店へ商なふ、名



前を太兵衛といふ、今一人は其の同居人で、名前をば武兵衛と申しまして諸所の宿屋〳〵へ、小間物を商ひまする渡世で……此の兩人が粗忽ッかしいことは、一ト通りではございません……然れど愛敬もので、商法の掛け引は上手いもので、些とも平素の粗忽ッかしいことは、出ないのでございますから、有福に生活してをりまする……共に粗忽ッかしいから、大層氣が合ひまして、兄弟のごとくにしてをります……一日のこと武兵衛さん、大層喜こんで　武「兄貴……一寸と今日は商賣を休んで、運動して來やすから、何分願ひます　太「武兵衛さん、訝だねエ……美服こんで何處へ行くんだエ　武「今日は兩國の川開き、此の節一寸とした意外い利益があッ

たから、散財て來やうと思ッて……　太「お止し〳〵、お前ぐらゐ粗忽ッかしい人間は無いんだから、雜沓へ行ッて、間違ひでもすると可ねへからマア止した方が宜からう……お前が四万六千日なぞへお參りをしたッて、御利益なぞは有りやアしないよ　武「四万六千日ヂャアないよ……兩國の今日は川開きへ行くんだ……　太「然うーか……然う間違へるから、お止しといふんだ　武「己れの方で間違へたんヂャアないや、お前の方で間違へるんだ……兎に角行ッて來ますよ　太「ヂャア氣を付けて行ッてお出でよ。」爰で武兵衛さんが兩國へ參りますると、大した人出でございます……尤とも川開きは、幕府の時分は五月二十八日、當今より盛んでございまし



た……並び茶屋がありまする、家根船、屋形、白こぼし、両國の川は船で埋りました……今日は然う參りません、柳橋に家根船が只た六艘しかない昔しとは大層變りました、然れど陸の方は賑やかでございます……橋は昔しと違ひまして、巾廣に成りましたし、人道車道と立ち分ッてをりまする畫の中からスポン〳〵と花火の音、此方を見ると船頭が、一人前何程といふので、客を勸めてをります……氷屋は一年の生活を、此處で皆な取らうといふので、威勢よく　氷「氷〳〵……。」ト吐鳴ッてをります、日の沒れ合の人といふ者は、芋を揉むやうでございます……警官は其の間だを保護してをりまする、大層い人出だ　武「己らア一躰、花火のドウーンといふ

音を聞くと、宜い心もちだ……ヤア上ッた〳〵……畫のうちは、黑くッて感心しねエ、夜になッてから、奇麗なとこを早く見てエナ……仕かけ物でも一つ見てへもんだ。」ト橋の袂へ參りまするど向ふから一人駈け出して來た奴がある……武兵衛さんの胸のところへ、頭をストウーンと打つけました　武「オヽ痛ヘ畜生……氣をッけやアがれ、盲目ヂヤアあるめエ……アー痛エ……烈く胸へ打付かりヤアがッた、オヽ痛かッた、氣息が留ッた……然うして謝まりもしやアがらねへで、先方へ駈け出してッちまつた、畜生め……アー痛へ……アー痛エ……水でも一杯飲まうかなア。」ト懷中へ手を入れまするど、懷中嚢がない　武「オヤ……畜生……今の奴は盜人だ……

…己れの紙嚢を持ツてッちまつた、サア大變〜……彼れを奪られちまッチャア、小遣も何も有りャアしねエ……折角貯めた五圓紙幣が三枚、壹圓紙幣が貳枚と、其の外に小出しの銀貨、皆んな奪られちまッた、水も飲むことも出來ねエ……太兵衛さんに留られたが、言ふことを諾て花火へ來なキャア、宜かッた……夫れに書付が澤山這入ッてらア、困ッたことをしたなア……己れは粗忽ッかしいから、皆な帳面へ記して置いた……往れがない日には、金は兎も角皆な覺ねが有りャアしねエ……サア大變なことをしちまッたなア、何處へ行ッたか、モウ追ッかけたッて間に合ねエ、最う其のうちに散〜燈火が點いて來た　武「忌いましい、景氣よく花火をあげて

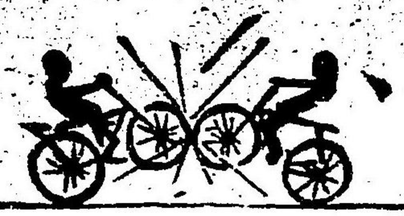
ぬやアがる……モウ見る氣力も衰ろへちまッた、詰らねへ〜〜〜、歸ら〜〜　○「モシ茶處へ行くなア、武兵衛さんヂャアないか　武「オヤ、旦人かと思ッたら、貸君は柴田さんですか　柴「何うしやした武兵衛さん　武「何うしたにも斯うしたにも、只今巾着切りに紙嚢を奪られました……一文なしに成りました、花火を見に來て、見ずに歸るんで……　柴「夫リャアお氣の毒だ、ヤア拙宅へお寄んなさい　武「イエ、私しや歸りませう　柴「其んなことを言はずにお寄んなさい、御馳走しますから、ヤアお寄んなさい……私シャア當時此の先きで、待合茶屋を出してゐます　武「アー柴田さん、待合をお出しなすッて……夫リャア結搆です　柴「汚ねへ家で

すが、米澤町で桝屋と言ッて……マア宜いからお寄なさい。」ト武兵衛を引ッ張ッて來て門口から　柴「オイ〳〵。」女房さんが　女「オヤお歸んなさい　柴「途中でねエ、珍らしい武兵衛さんに遇ッて、御一緒したんだ……只今街盗に紙嚢を奪られたッて、氣の毒な話しで……た酒が好きだから、一ぱい燗て武兵衛さんに進げねエ……サア援はずお上んなさい　武「宜いお住居ですねエ……何うかマア穿物は女房さん、打捨ッといてお呉んなさい……誠とに女房さん暫らくでしたねエ　柴「武兵衛さん、家内ヂャアありませんよ……夫りやア當家の下婢だ　武「アー下婢衆ですか、粗忽ッかしいもんだから　妻「何うも暫らくですねエ、武兵衛さん　武「イヤ、此

ワヤア御妻君、粗忽かしいから、下婢衆と間違へちまッた　妻「眞實に毎でも面白いこと……武兵衛さんヂャアア、可笑い話しがあるんですよ、毎でもお前さんのお噂さばかりして……何日でしたッけ、子供が柱へ頭部を打つけたら……危ないこと、頭部の龜の尾が痛みヤアしないかと、言ッたことがあつて、大笑ひをしたことが有りましたけヲ　武「其んなことが有りましたねエ、粗忽ッかしいもんですから、何をいふか分りません　柴「マア何しろ一ぱいお飲んなさい。」ト夫婦の者が饗應てくれます、武兵衛さんも此家でお酒を御馳走になり、大層宜い心持ちになりまして、八時過ッたらうと思ふ時分に、恐そろしい往來が人聲、何かの間違だらうと、下婢に

聞いて見ますと……只今両國の橋の欄干が落ち、大層人が死んだといふ、今大騒ぎ……。」武兵衛も實に驚ろいて　武「有りがたい〳〵……巾着切に紙幣を奪られなけりゃア、己らア橋の上で、今時分花火を見てゐるんだ……吃度欄干が取れて、己れは落ツこちて死ぬに違へねエ……却ッて盗賊に遇ッたはうが、運が宜いぐれへなもんだ　柴「ヤ、其んなものかも知れない、今夜は泊ッてお出でなさい。」武兵衛も太層酔ひましたから、當家へ泊ることに相成りました……お話しが替り、太兵衛は武兵衛が歸ッて來ない……家を出たり這入ッたり、心配をしてをりまするど、往來はトリ〳〵の評判……明開きを欄干が取れて、人が川の中へ落ち、大層死んだ、百人

だの、貳百人だのと針ほどのことを棒ほどに言ッて、騒いでをる……太兵衛が、驚ろいたの、驚ろかないの　太「ダカラ言はねエこッチャアねエ、ヒョッとしたら武兵衛の身に、間違ひでもありはしないか。」ト心配をしてをりましたが、ドウ〳〵其の夜歸ッて參りません　太「此リヤア死にはしないか。」ト翌日起きて朝飯を食べ、兩國へ捜しに行かうと思ふところへ、門口から　△「警察から參りました　太「何でございます　△「お前さんの家に、武兵衛こいふ同居人があるそうだネ　太「ヘエございます　△「夫れがねエ、昨夜兩國橋の欄干が取れて、陷ッて死去したといふ、久松町の警察から報知でした……此の招魂狀をもッて、死骸引取りに、久町松

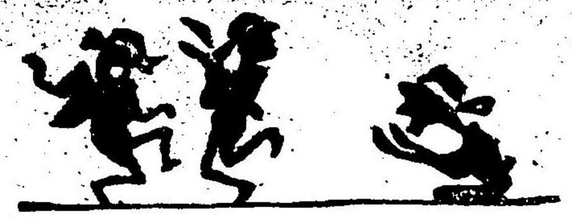


警察まで、早速出頭なさい　太「有がたう存じます……女房さん〳〵……オイ女房さん、大變なことが出來たよ……言はねエ、こッチャアねエトウ〳〵お前、武兵衛が昨夜、両國で死んだてへ、警察から招喚になッた　妻「夫リャア大變ですねエ、早速お前さん行ッてお出でなさい　太「飛んでもないことが出來たなア……女房さん、羽織を出しなよ。」ト太兵衛が仕度をいたしまして、路次を出まして四五軒參ると、向ふから武兵衛、宜い心もちで立ち歸ッて參りました　武「オイ、太兵衛兄貴ヂャアねへか……太「オイ、戯談ヂャアねせへ……お前武兵衛さんヂャアねへか、宜い加減にしねエ……己れが言はねへこッチャアねへヂャアねへか、雜沓を行くて

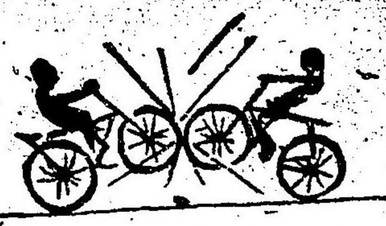
べと、間違ひがあるからと、彼れほど止めたのを、諾なくッて出かけるから……お前が死んだッて、警察から死骸を引取りに來いといふ、此の通り招喚狀がついてゐる……　武「エッ、此リャア大變だ、私しが死にましたへ　太「然うよ……サ、己れと一緒に、お前の死骸を引取りに行くんだ……一緒に行きなせエ　武「大變なことに成りましたなア……止しャア宜かッた……止められたのを諾かないで私しが諾ないのが惡かッた……ヂャア太兵衛さんお、願ひ申します　太「ヂャア人力車へ乘ッて出かけやう。」ト二人は久松町の警察まで參りました　太「武兵衛さん確かりしねへよ、此の内に本郷の死骸があるんだから……引取るんだよ　武「何分宜しくお

願ひ申します　太「エー申し上ます、お掛りへ申し上げます　○「何たい
太「私しは下谷車坂町吉田太兵衛と申します、お招喚を、同居人武兵衛の
死骸を引取りに出ました　○「アー然やうか、少々扣えてお出で……オイ
〳〵、向ふに武兵衛の死骸があるから、一寸と行ッて見て來なさい　太「
畏こまりました……武兵衛さん早く來なせエ……オヽ此處だ〳〵……ヘエ
御免なさい……エー死骸を一寸と……　巡「親族の者かナ　太「エー然や
うでございます　巡「此方へ來て見なさい　太「サア武兵衛さん見ねエ、
お前も此んな淺間しい姿になッちまッた　武「情けないことに成りました
なア何うも　太「サア開けるから能く見ねエ……ソラ何うたい　武「ヘエ

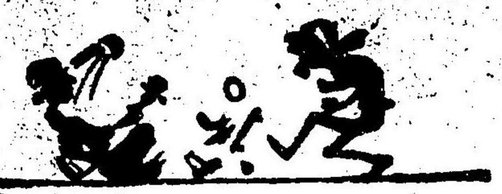
此リヤア太兵衛さん、此リヤア私しヂヤア有りませんせ　太「馬鹿を言ひ
ねエ、夫れだからお前は粗忽ッかしいんだ……自分の死骸を見て、己れヂ
ヤアねへかと仕何だ……チヤアンと警察署から引取りに來いと仰シヤッて
引取りに來たんヂヤアねへか　武「だッて訝しいもの、私しとは違ッてゐ
る　太「分らねへことを言ひなさんナ……己れがなア、お前でねへものを
お前を連れて態々此處まで、來るやつがあるものか……搆はず兩人で引取
ッて行きヤア宜いヂヤアねへか　武「何うしても引取れません……私しヂ
ヤアない　太「分らねへことを言ふなア……お前でねへ者をお前と、誰れ
が其んな分らねへことを言ふやつが有るもんか……宜い加減にしねへな。」



拳を固めまして、脊中を突然一つドウーンと打ちました　武「痛うございます、何をするんです　太「分らねへから打なぐるんだ　巡「オイ〳〵、其處で何を兩人で言ひ爭そッてゐる　太「ヘエ、餘り分らないことを申しますから、私しが打ッたんで……　武「分らねへッて、お前さんの方が分らねへんで……　巡「一躰何ういふわけだ　武「太兵衛さんの言ふニヤア　お前が死んだから、此の死骸を引取れと斯う申すんで……デございますが何う見ても私しヂヤアないやうでございますから、引取れないと申しました……夫れを何でも引取れと申しまして私しの脊中を打つんで……　巡「マア一躰、お前がたの言ふことはサッパリ分らん……全躰お前は何ヂヤ、



太「エー私しは吉田太兵衛と申します　巡「デお前は何といふ　武「ヘエ私しは同居人の武兵衛と申します　巡「フウン……シテ此の死骸は何てへんだ　太「イエ此れが、私しのところの同居人の武兵衛の死骸でございます　巡「訝しいではないか……ヂヤア武兵衛が兩人あるのか　太「イエ當人でございます　巡「ダッて此の死骸が武兵衛で、引取りに來たのが武兵衛とは訝しいヂヤアないか　武「デございますから、私しの死骸でないと申して居るんです　巡「分らねへ人等だなア……お前が太兵衛の同居人で武兵衛といふ者なのか　武「然やうでございます　巡「此の死骸は、此リヤ何といふんだ……　武「此の死骸は、矢ッ張私しだといふんで　巡「馬



鹿を言ひなさい、當人が其處にゐて、死骸がお前といふことは無いヂャアないか……此れは少々尋ねることが有るから、此方へ來なさい　兩人「へエ……　巡「ア此處に斯ういふものがある、是れはお前覺えがあるか……武「エー夫リャア私しの紙嚢で、夫れが昨夜金子をば入れまして、街盗に奪られた紙嚢……夫れを持ッてるからにヤア、貴君盗賊か　巡「馬鹿を言へ、シテ見ると其の死骸は武兵衛ではない……お前は昨夜賊に紙嚢を奪られたといふところを見ると、お前の紙嚢を奪ッた賊が、橋から落ちて死んだんだらう……此方においては懐中を調べると、證據の書付が澤山あるから、太兵衛同居人武兵衛と心得て、招喚狀をつけたんだ……正しく此リ

ヤア、お前の紙嚢を取ッた賊の死骸だ　武「然やうでございますか、ヂャア私しヂャアございませんナ　巡「當然だ、お前方兩人は、餘ほど粗忽な人だナ　武「エー粗忽ッかしい方では大關でございます　巡「然うだらう……然う事が定れば、此の紙嚢はお前のならば、お前に下渡てやるから、此の紙嚢をもッて早く宅へ歸んなさい、此リヤ物の間違ひヂャ　武「ソラ御覽なさいナ太兵衛さん……間違ひだと仰シャる、盗賊の死骸を見て、お前の死骸だから引取れ〳〵ッて、己の春中を打なぐッて、餘りといへば酷うございます……恐れながら申し上げます、此リヤア何方が善か惡いか、御裁判を願ひます　巡「善いも惡いもないから、お前は打たれても搏はん

から、早く歸んなさい　武「戯談言ッヤア可ません……打たれて宜いて
へ理窟はございません、白い黒いを分て下さい　巡「幾ら言ッてもお前は
勝てんよ　武「何故でございます　巡「能う考へて見なさい、太兵衛（多
勢）に武兵衛（無勢）は勝たれぬワエ。」

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

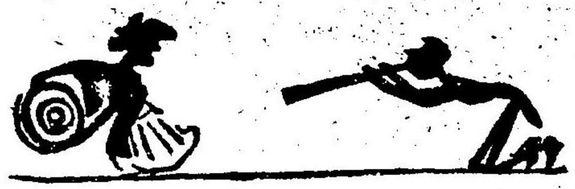
はなむけ

强慾は無慾に似たりと申します……餘り慾をかわかすと損をするやうなこ
とが御坐います……然れと慾どいふものは、限りないものでございます……
隨分慾のために大切なお名前を、疵つけるやうなことがございます、慾
の深い人は、他人は反ツて死んでも自分さへ宜ければ宜いといふ、恐ろし
い人がございまして……然ういふ人は、寢ても覺めても　○「何うかして
利益たいものだ、何をしたら宜からう……此家に奉公人もあるが、一躰奉
公人なんてものは、費へなものだ……人一人といふものは大きなものだ、

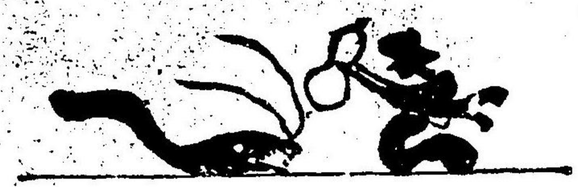
暇を出してしまをう。」両人暇をやりまして、夫婦かけ向ひに相成りました少し忙がしいが前々通り用が足りて参りました……　○「今まで費へなことをした、是れで用が足りるところを見ると、女房てへものも費へなものだ……離縁をしてしをう……。」爰で一人になりました、スルト同じく用が足ります……　○「是は妙だ……シテ見ると己れも費ねだ……。」トウ〳〵最終には、自分も身を投げた人がございます……然考がへては限りのない事でございます……爰に御兄弟で、兄さんが極只今申すやうな人で……舎弟の方は、錢づかいの荒い、昔の江戸ッ子氣性といふ、宵越しの錢は持たない、火に崇なぞと言ッて、外國人の寝言のやうに、バッバ〳〵と費ひま

す……結局然ういふ人でございますから、三十日前や何かになりますと、借財のために責められます、家内が心配をして　妻「お前さん、何うするつもりですよ……モウ明日は三十日ですよ　亭「三十日が來る、何うする〳〵〳〵とは、書生が女義太夫でも聞きャアしめエし無暗に何うする〳〵つてッたッて、仕やうがねエ　妻「ですがねエ借金取りが來て、言分をするなア妾しヂャアないか……實に困りまさア……年中ブラ〳〵遊んでゐて何うかしてくれないと、妾しが困りますよ……僅かのお金が有リャア宜いんチャアないか……十圓も有りやア何うかなるんだアチ……何處かへ行ッて、調達てお出でなさいよ　亭「困ッたねエ……己れだッて遊んでゐ

るわけヂャアねへんだが、爲ることなすことが、皆な手違へになッて、何うにも斯うにも法がつかねへんだ困まッちまッた　妻「ですがねエ、何處かで出來ませんかねエ……　亭「スッカリ詰ッちまッて、出來ねエ　妻「ヂャア斯うしたら宜うございませう……お前さんの兄さんは、お金も彼んなに貯めて、立派にやッてるんだから、借りに行たら宜うございませう、亭「馬鹿ア言へ……兄きが貸すなら、手前に言はれなくッたッて、疾くに行ッてるんだ……兄弟で、彼んなものが何うして出來たかと、己れが不思議でならねエ……彼奴ア兄きとも何とも思はねエ……己れの顏を見ると、銀金は親子でも他人だッて、始終言ッて言ヤアがる……全体癪に障ッてな



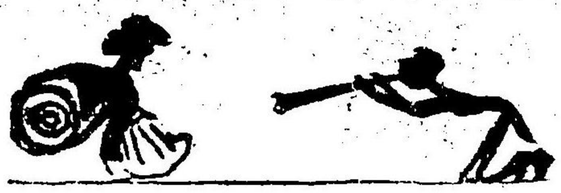
らねへ……何んなことがあッても、彼奴には貸せッてへことは、舌を噛んで死んでも言ふめへと思ふ……　妻「其んなことを言ッたッて、詮方がないヂャアないか……困るところだから、行ッてお出でなさいナ　亭「行けッたッて、己らア否やだよ……貸せッてへことをいふのが否やだ　妻「否やならば、貸せッてへことを言はずに、借りてお出でなさいナ　亭「馬鹿ア言へ……貸せッたッて貸せねへ者が何にも言はなくッて、貸す道理がねへヂャアねへか　妻「其處ですよ……お前さんがねエ、智恵を出して借りて來るんです……　亭「何ういふ智恵を……　妻「アノ夫れ久しい以前、兄さんが何處かへ行ッたことが有りませう、旅行へ……　亭「然う〳〵。



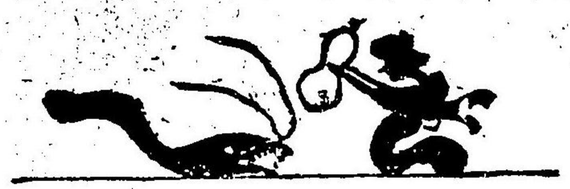
妻「其の時にお前さんが、餞別として、彼アいふ人だからてへんで、お金を五圓進げたことが有るでせう　亭「ウム、成るほど……スッカリ忘れちまッた……彼の時分は、己れが大變に工面が宜くッて、彼奴ア大層喜こびヤがッた　妻「然ういふことがあるんだから、お前さんが是れから行ッて何にも言はないで兄さんにねエ、私しは據どころないことがあッて、一寸と旅へ參ります、ト暇乞ひに行ッてごらん……然うすりャア、此方で五圓遣ッてあるんだから……兄さんのことだから、返禮に十圓ぐらゐは與れるだらう……良しんば其んなに與れなくッても、五圓は何うしても與れるだらう……然うすりャア、夫れで此の遣繰りをつけるから……否やでもあら

うがナヨイと行ッてお出でナ……　亭「ウム成るほど、巧へナ、其處まで己れは氣が付かなかッた……言はず語らずで、餞別の返禮を取るたア、何ぼ何だッて、此いつア遣すだらう……デャア行ッて來るよ　妻「早く行ッてお出でなさいよ。」是れから自宅を出まして、兄さのところへ參りました此の兄きといふ奴が、强慾もので、女房もなし只一人で、小僧一人、若い衆と貳人を使ふ……渡世は質屋で、傍はらに高利を貸すといふ……一文錢か生爪かといふ、恐しい奴でございます……表口から這入にくいから、裏手から　弟「御免なさい……御免なさい……　兄「誰人ですナ……掃除屋さんかへ　弟「オヤ〳〵掃除屋と相違へられる、モウ人間も、臭みがつい

チャア社やうがねエ。」ト口小言を言ひながら　弟「エー掃除屋ヂャアこさいません　弟「紙屑屋かねエ……　弟「碌なものと間違へヤアしねエ……御免なせエ　兄「オー誰れだと思ッたら、珍らしい人が來た……此方へ上んねエ　弟「何うも御無沙汰いたしました　兄「久しく遇はなかッた……マア、お互ひに無事で結構だ　弟「何うも兄さん……今日參ッたなア、少しお話しがあッて參ッたんで……　兄「ウム、何の話したか知らないが、錢金は親子でも他人てへことがあるぞ……況て兄弟は、他人の始まりてへことがある……何うか貸借のことは一錢も出來ないから、夫れだけは念入てきくから……外に己れに、利益口があるとか何とかいふなら、夫じや話

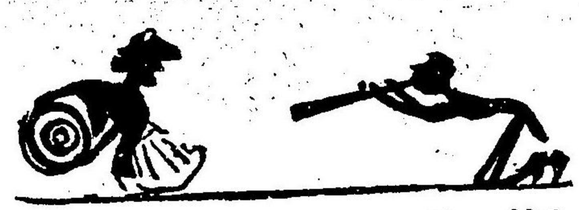


しに乗ッても宜いが、何ういふことだ……　弟「癪に障ッちまふナ。」ト思ッたが口へは出さない　弟「兄さん、決して私が、錢を借りに來たんヂャアねエ　兄「然うか……お前の顏色が變だから、何程か貸せッてへんだと思ッた……實は否やな心持ちがした　弟「錢を貸せの何のッてへ話しヂャアないから、安心してた呉んねエ……今度私しは、據どこねいことがありまして、遠方へ少しの間だ行ッて來やうと思ッて……夫れゆゑ、お暇乞ひに參りました　兄「アー然うかい……長いこつちヤア有るめへ　弟「エー少しの内で……　兄「ア夫りヤア宜い……お前の不在のうち火事でもあッたら困るだらう、決して心配せずに行ッて來るが宜い、自分用ぢやア有る



めエ　弟「エー然やうでございます……據どころなく他人の用で參るんでございます　兄「ヂャア餘ッぽど利益かるナ　弟「ナニ利益かりも何もしねへんで……行くにも種々理由ありで、據どころなく出かけるんで　兄「其んなことを言ふナ……利益かるなら利益かると、打ち明けて話せ……己れも久しく何か食ッたことがねへから、立ち振舞に何か己れに驕ッてくれ　弟「戯談言ッチャア可ません……驕るなんてエ、其んな利益かる話しヂャアねへんですから……言ふに言はれねへ、種々な其の其處に事があるんでげして出かけるんでございますから……　兄「イヤア氣樂ねをするナ……ヤア貴樣が旅へ行くなら、茶でも入れてやりてへと思ふが、生憎火がねへ

から、湯もなし、臺所の水を持ッて來て、水でも飲んで行が宜い　弟「戯談言ッチャア可ません……水を持ッて來て飲んで御覽なせへ、腹の工合が惡くなりますから、何にも飲まなくッても宜いんです……ヤ、モウお別れいたします。」ト舍弟が立ちかゝりましたら、何程か出すだらうと、立ッて見たところが、其の氣振りがないんで　弟「ウーン。」詮方がないから又た坐りました　弟「兄さん、私ア明日出かけるんで……　兄「ヂアヤア、行ッて來ねエ　弟「困ッたなア兄さん……夫れより久しい以前、お前さんが何處かへ行ッたことが有りましたねエ　兄「然う〳〵、此れほど、未だ開けてゐなカッたが、北海道まで行ッて來た　弟「彼の際私しが何程か、お



前さんに夫れねエ……餞別をソレ……したことが有りましたッけ　兄「オ然う〜……能く覺ねてゐるなア……然う言へば貰ッたことがあッたッけ　弟「忘れチャア可ません、夫れで今度私しが旅へ立つんで……　兄「行ッて來なよ　弟「いよ〜行きます　兄「其んなに斷とらなくッても宜いから、行ッて來なよ。」何を言ッても兄が分りませんから　弟「困ッたなア、チョッ（舌打）ダカラ止さうと思ッたんだ、チョッ（舌打）女房が言ッたから來たんだが……チョッ（舌打）起ち機を失なッちまッた、餘り分らないから舍弟も、腹立ち紛れに立たうとしました時に、尾籠なお話しをするやうでございますが、大きな放屁をブウーッとしました　兄「苦いことをするア

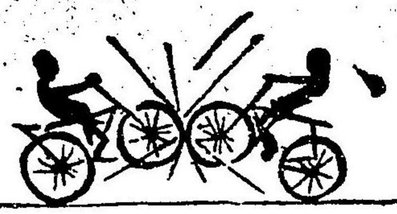
ヤアねへか……臭へヂャアねへか　弟「勘辨してお呉んねエ、ツと粗忽でございます　兄「粗忽だッて、人の前で大きいのをブウーッとは……せ氣をつけねへナ　弟「濟みません……其の代り、私しは夫れで、一句浮かんだんです、何うでせう　兄「何てへんだ　弟「斯ういふんです。」

旅立ちに放屁一つが置き土産

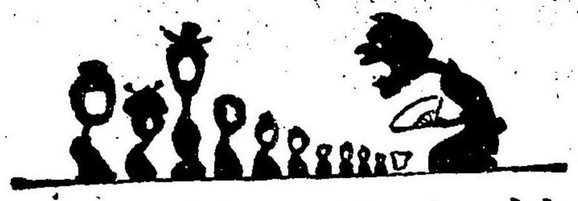
兄「然うか面白いナ……己れが跡をつけやう　弟「お前さんなア何てへんだ　兄「己れのはナ。」

餘り臭さにはなむけもせず

世の中ニャア甚い奴があるもんだ、ト舍弟が思ひまして、立ち歸ッて成る



人に此の話しをすると……　○「マ、世の中ニャア甚い人があッたもんだ他人でさい夫れだけのことはするものを、兄弟で、金があッて餞別の返しまでしないとは甚い……宜うございます、私しが行ッて、何程か話しをして、金を借りて來てあげませう　弟「打捨ッておいて下さい……モウ彼奴のところへ、出這入をしませんから……　○「イーエお前さんが行くと、却ッて喧嘩アするやうなもんだ……私しが行ッて、話してあげませう。」親切な人があるもんで、態々先方へ出て參りまして、水口から案内で奥へ這入りました　兄「サア此方へお這入んなさい　○「アー暫らくでございました　兄「此りャア珍らしいお方……久しくお目にかゝりません……サア



何うぞ此方へ……生憎と火が消えて、煙草の火もない……只今此れから發火して、お茶でも入れますから　○「何うぞお構ひなすッてお呉んなさるナ……偖外のこッチャアありませんが、お前さんの舍弟さんのコッて、實は參ッたんで……彼のお方が、此節非常に困難の容子で、昨日お前さんのところへ參りまして、何程か拜借をしたいッてんで、來たんですが……御兄弟の中でも、言い憎いてへんで其のまゝ立ち歸ッたんで……實に彼のお方は、お氣の毒なんですから、私しも宜いお世話だが、今日出たんですが何うか舍弟さんに、何程か一つ貸してやッて下さるわけニャア參りません　兄「お氣の毒さまだが、夫りャ一錢も出來ません……然ういふことな

らお出で下されチャア、眞とに迷惑な話しで……何うぞお手を引いて下さい　○「ナニ實は頼まれたわけヂャアないが、餘まりお氣の毒だから參ッたんです……貧さんと仰シャリャア宜いマア、お前さんも能く考がへて御覽んなさい……舍弟さんからお餞別を貰ッたことがあるさうだ其の返禮ぐらゐしたッて宜いヂャアありませんか　兄「大きに御世話です、先方が志ざしあッて與れたんですから、私しが貰ッて置たんです……私しは今度遣る志ざしがないから遣らないんで　○「夫りアヤお前さん、餘まり甚い、兄「何が甚い……　○「他人でさへ困る時には貰ぐ人がある……お前さん兄弟ヂャアないか　兄「兄弟と言ひますが、兄弟他人の始まりと言ひます

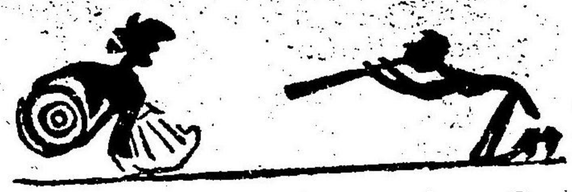
から、他人も同じこッた……錢金のことは一切出來ません　○「ヤお前さんぐらゐ世の中に、客嗇な人はない……呆れけへッて物が言はれねエたアお前さんのコッた……出すものは舌を出すのも否やだといふんでせう……何幾まで生きられると思ッてゐる、呆れけへッた人だ　兄「何ですとへ、私しが客嗇だ……出すものは舌を出すのも否やだらうと戯談言ッチャア可ねへ……私ぐらゐ大した人間はなからうと思ッてる　○「何が大したお前さん人間だ　兄「私は其んな客嗇な人間ヂャアない……此の財産は、私が死ねば殘らず他人に遣ッちまひますんで……。」

両手に花

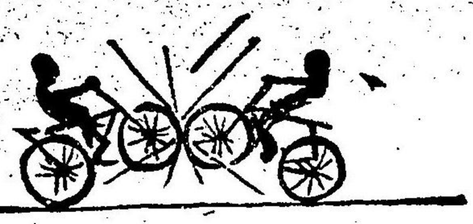
エー一寸と人情がゝッた落し話しを一席申し上げます、何ごとも色と慾の世の中でございまして、人と生れまして此れを去るといふことは難いことでございます……慾のために身を果すか、色のために一生を過まつといふやうなことが幾らもございます……尤とも色氣といふものは、何ごとにてもあるもんでございます……其の色氣の源は婦人ださうでございます何うしても御酒を召しあがる時には、酌は女といふことを申します……美くしい婦人が一寸とお酌をといふ、どの飲めない口でも、一献も過すやうな

ことに成ります……能く道樂といふことを申します、道樂とは道を樂しむと書くんで、道樂のうちは未だ宜しいのですが、終には奢を樂しむとか、又は道に落ちるとか申して、然ういふことになッては大きに困ります……ですが道樂をした人でないと洒落も分らず、又た藝妓や娼妓の中で遊んだ人でなければ、金の費ひッぷりも、形裝の裝らへも分らないもんです……以前旗本の御次男だとか三男だとかいふと、先づお寒い時分なら糸織の藍微塵に黒羽二重の羽織、茶絹丈の帶に小刀のを帶して、殿中の草履下駄なぞを穿さまして、スラリ〳〵と遊んで歩行いた人もございましたが、開化になれば元が若殿さまで、一寸と小粋に遊んでゐる、其の中に又た商法も

お上手……少し開化の世に出たお人でございますから學問もあり何處か遊ぶにも品が宜しうございます、お名前は野呂井照雄といふ先生がありまして、元お旗本の御次男さま、お年が三十五といふので、男ッ振りが美くつて誠に容子が宜しうございまして、先づ藝妓や娼妓が思ひつく人でございます……服裝を見ると、南部の藍の万筋に琉球の下着で、白絹縮のヘコ帶に金側の時計、お約束、黒縮緬のお羽織、腰差の煙草入は、象牙の筒は餘り性は宜くないが、股に細かに刻てありまして、段々小袖すれになッて少し平になッてゐるところが宜い、なんぞといふのが、自慢で、樫留の煙草入にヨルイの金物、珊瑚珠の少し色は良くない、瑾が出てゐるけれども



、金の紐口を箱て誤魔化して見せびらかすといふやうな質、表附きの反りの駒下駄を穿いて、鼠色の帽子を脱ながら、ガラリと一軒の格子を明けまして……此の家は美濃屋といふ骨董屋さんだ、と言ッて賣物が幾らも飾ッてない、た客があッて斯ういふものが欲いといふと、方々から買ひ出して來て見せやうと、一風替ッた骨董屋さんです……名前半六さん苗字を山野と申して年は五十一だが通粋た人です、女房は以前松葉屋といふ岡國の船宿に働いてゐたお仙といふ、差して美い女といふではございませんが、色の白いポッチャリとした摘みッ鼻の、笑ふと笑凹のある愛ッくるしい女で、……半六さんが蒔く世辭で贔負になッて、此の女中と評な交情にな

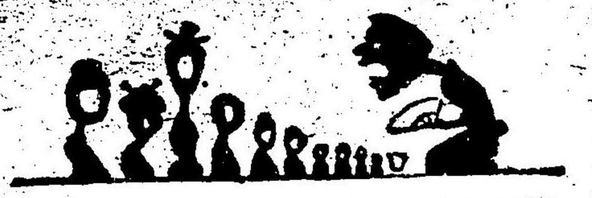


つてとう〳〵夫婦になッたといふ混腦、家はナカ〳〵堅氣の商人、帆立貝で貝柱を煮て食るくらゐですから、餘まりお金がある家ではございません

照「御免なさい　仙「誰人　照「何うも存外の御不沙汰を……　半「イヤ是れは何うも……サ、マア〳〵其處を片付けて……サ彼方へ　照「御飯中に來て、お邪魔をしては濟みませんネ　仙「オヤマア入らつしやいまし、今子貴君のお噂を申して……久しく入らツしやらないから、貴君のことばかり申して居りました……貴君のやうでは何うしても女の子の方で打捨ツて置かないから詮方がないッて、今貴君のことを賞めてゐましたの……

照「參るか參らいうちに油たア驚ろく子……油と來チャア最う恐れ入るか

ら子　半「油ヂャアねへが、妙な菓子を貰ッたんで……お仙、夫れを切んな、美味くはないけれども一寸……ア、極甘いのはお嫌ひだから、アー何が宜い此の間ソレ小田原から歸ッて來た蝶江さんから貰ッた……餘りムシャ〳〵食るわけのもんでもねへから厚く切ッチャア可ねへよ……然うしてお茶を入れて來ナ　照「僕はネ、改たまつては言惡いが、貴君に少し相談をしなけりャア成らないんだテ、僕は實は心痛の事があッて參ッたんで子……疾より此の事を思ひながら遠がに言ひ兼てねエ、幾ら懇意の間でも何だか何うもボンヤリして、何うも其の發しないので……　半「道理でお顏の色が惡いが、御勉强過しヂャア有りませんか……女の子の御勉强ヂャア可



ませんせ、お身躰が堪りません、未だ御壯年だけれども餘り夜更しなどは可ませんよ　照「何うも細君の前ヂャ言ひ惡いネ　仙「仰シャいよ、貴君何のことでございますか……何うせ貴君の浮氣をなさることは知ッてをりますワチ……誰れだッて夫りやア貴君に惚れない人はない、ネ何んなに女の子にヤレ是れ言はれたんでせう　半「何か女の子の御心配でございませうが、正可に輕卒のことをするとか女の子と密と遠くへ行かうなんてことは……　照「イヤ夫りやア有りアしません……逃亡するの情死をするのなんて、正可に夫れほど不開化ヂャア無いがネ半六さん……君も知ッてる通り、僕は極プラ〳〵ものを遊でゐるのを斯うやッて小遣をくれて、遊ばし

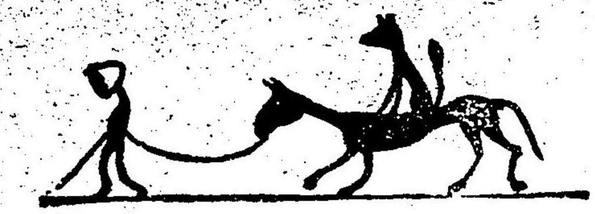
してくれるところの婦人があるんだねエ　半「ヘエー何うも大層いナ、朝己惚氣か何かで……大概知ッてゐやす、先づ方々にあるんでげせう、又た此頃赤坂に出來たッてネ　照「ハア何其んな處には出來ないが、浪花町の小伊代さんネ　半「ウン小伊代チャン、聞きました美い女だねエ……お前見たらう　仙「見ましたよ、赤ら顔で愛ッくるしい女で、マア髪の毛の艶がよくつて、身丈格好の宜い按排な、姿の良い、晴衣裳の箱丁を遇れて來たが、柳橋には彼のくらゐな美い女はないッて子、賞めてゐましたよ　照オヤ然うでしたか、僕も一寸としたところから深い交情になッて……一寸と好いたといふやうな極時代の話しだけれども、僕の身が立ッたら斯う…

…といふ舌の長いことを言ッたんだ、夫れで僕にマア親切にしてくれて少し懐中が悪いといふと……何うせ在るもんだから、持ッて行ッてお費ひなさい、と些とぐらゐ無理な金も借りて、貸すんヂャ有るだらうけれどもマア僕の差支へた時はちャンとしてくれる……併し親切に先方でもして呉れるのは、此方を眞實の人と思ふからだらうから、何うしても女房にしなけりやアならねへやうになッてゐる、然處が貴君も知ッてゐるだらう、本所に居たとき、隣屋敷にゐたた孃ね　半「ウン、彼れが何うしました　照「今秋葉の原の六間堀の、彼の夫れ本庄彦兵衛といふ者の娘でお留といッて年は二十二だが、モウ両親の親掛も死に絶えてしまつたけれども、以前

から仕へたところの女と兩人ぐらし……彼の忠義のお仲といふのは、年は老てるが眞實の者だからッてんで、今でも傍を離れずにゐるんだが、彼の通り堅い屋敷だから、金も以前からあり夫れに祿券のところも手離さずにゐるんだから、此れが何分づゝか、月々に這入るといふことになッてゐるから、少しも困るどこヂャアない、先づ裕福に暮らしてゐるが只だ知音親族がないから僕に末々まで力になッてくれまいかと言はれるから……僕も舊來馴染ヂャアあるし、隣づからの事だから……元僕も燕本の忰で若樣と言はれた時分ッヒ遊びに行ッたのが始めで深い交情になり、是れも末々までの約束をしたんです　半「成るほど　照「ダカラ是れも女房にもしなけ

れば成らないやうなわけだが、僕の考がへヂヤア……何うも兩女あッチヤ困るから、何方か一方に定めなければ成らずと、言ッて何方だッて堅くッて、マア何方を女房にしたら宜からうといふことで、僕は誠とに迷ッてゐるんだが子……マア貴君の見込では何方が宜からう　半「何うも困りますネ、何うも此ればッかりは御緣づくだから子、何方と言ッて此れは可ませんで……お仙お前は何と思ふ　仙「然うでございますヲ、御緣づくもあるだらうけれど、お前さんの前だが妾の思ふところでは、夫りや情もありませうけれど、引手數多の浪花町の方よりも、御新造になさるなら、本庄さまのお嬢さまの方が、妾しは宜いかと思ひますヲエ貴君……浮れて情婦に

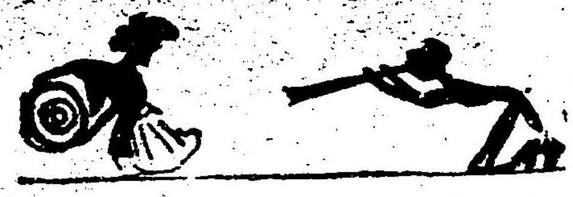
じてゐるか、權妻なら小伊代さんの方が、面白いには違ひないが、末々までのことを言へば、お嬢さまの方が宜いぢやないか　照「僕も然うは考がへてゐますが、是れを切るといふ段になると……極何うも其のナカ〳〵言ふに言へない、其處に小伊代さんの情愛といふ者が轉がッてゐやすからねエ、誠に困る　仙「困るたッて、然う甚くお困りなら仕方がない……只空漠しておく方が宜いぢやア有りませんか　照「イヤ因數してゐられないんです、何う考がへても一夫一婦といふわけに決定なければ成らんからナ……ヂャア浪花町の方を切りやせうか……何うも切り惡いからねエ、ナカ〳〵諾と言ッて切れチャ呉れめエ……何うも我がことゝ言ふものは自分で



定めにくいが、貴君はマア何方にします　半「今お仙の言ふ通り、御妻君になさるのなら本庄さまのお嬢さま、又た權妻なれば小伊代チャンだは

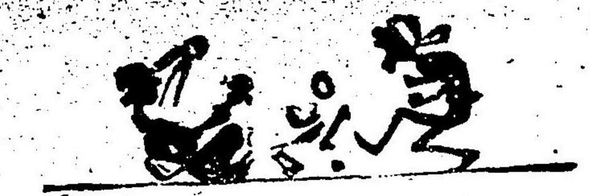
照「フム……僕の心も同じだ、然らば思ひ切ッて、小伊代とも交情を斷りませうか　半「お切んなさいよ、些とは面倒でも何が宜うございますよ、お嬢さまの方が……　照「思ひきりやせう　仙「弗つりと思ひきッておしまひなさいよ　照「ヂャア然う定めて、行ッて來やせう……ダけれど實は其本庄の方は堅いから、窮屈で～……　半「面白い方と申しては浪花町に限りますね……ヂャア浪花町におしなさいナ　照「本庄の方を切ると定めませうか　半「然うお定めなさい　照「ダガ是れが何うも、變に義理が

溺まッてゐますからナ……先づ行ッて一つ容子を見やせう　半「夫れヂャア斯うおしなさい、貴君が先方へ往ッて訝な風をして御覽なさい……訝ウツン～當ッて見て、夫りャア貴君のことだから、此奴は情がないナといふことは、お解りになりませうから、其の時は水臭いと思ッた方を思ひ切るとなさい　仙「可ませんよ、男の末練とか云ふもので……未練があッては可ませんよ夫れよりか惡いことは言ひませんから、思ひきッて浪花町へ往ッて、切めておしまひなさいナ　照「ヂャア然うしませう。」ト是れからブラリと出たが、浪花町に往ッて格子をガラ～　照「伊代チャン在宅かへ　婆「オヤ入らッしやいまし……姐さん入らッしやいましたよ旦那が

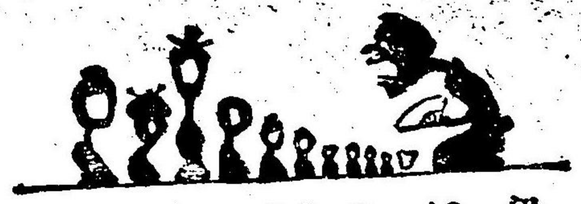


……何うも貴君マア一昨日の晩待ちばうけ……毎もの通り屹と入らッしやるだらうと、お約束があッたけれど、姐さんは、早く歸ッて入らッしやッて整然と貴君のお好きな着を取ッて、待ッてお出なすッたのを餘まりだッてねエ……眞とに甚うございますよ、姐さアん……　伊「アイ……オヤマアお上んなさい　照「何處へ行くの……　伊「此れから槇町へ……マア一寸とお上なさいナ　照「誠とに何うも久しぶりだナ。」長手の火鉢の前へ坐ると、奇麗に斯う掃除がしてあります、藝妓家の火鉢は奇麗なものでございます、鐵の角五徳にお着燒が二本つきまして、餅を燒くのが二本、何れも此れも同なじやうに磨いてあッて、抽斗は横が三つに下が二つ、大きな

鐵瓶があッて、大銅壺が附いてゐる……向ふに神棚がある、祀ッてあるのは、お岩稲荷に鬼子母神に摩利支天さま、左右に長提灯、夫れから御櫛頭の紙が捻りついて長く下ッてる、此方の方にはお福さまがあります、是れは仲店で買ッて來たのか、夫れとも市で買ッたか今戸燒です、是れに縮緬の布團が十枚も重ねてあッて、其の前に何だか見々した小判見たやうなものが飾ッてあります　伊「何だか妾は、一昨日の晩はお出でだらうッて早く歸ッて來たの……丁度宜い都合に蠣が來たから、お前さんが好きだから買ッておいて、貝柱の大きいのと、夫れに一寸と青海苔を些とばかり取ッて、一口召し上るだらうと思ッて、待ッてゐても來ないんだもの……大變

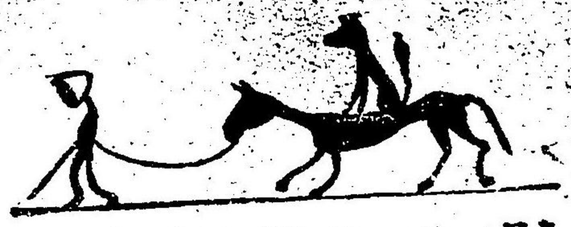


に考へちまつたよ、何うしたの　照「エー、此處ヂャア些と話しがしにくい、奥の四疊で一寸と顔をかしとくれ　伊「ア、一寸と何を持つといで、火鉢に澤山切炭を入れて烟草盆と、夫れにアノ旦那のお布團をお出しよ、お寒いことねエ……何をしてゐるんだねエアノ妾は可笑いんでございますよ、古着でねエ廣袖があつたの、上品な純子でね、袂のところにスウーッと剝布が這入つて、其の布が……何とか言ふ布だつて、此の間だ進めた人があるから、お前さんは似合ふだらふかと思つたけれど、妾シャ自分で着るよと言つて買つて置いたんですがヲ、眞綿が這入つてゐて暖たかですから、チョイと引つかけて御覽なさいナ　照「此れは暖かい　伊「何だか氣



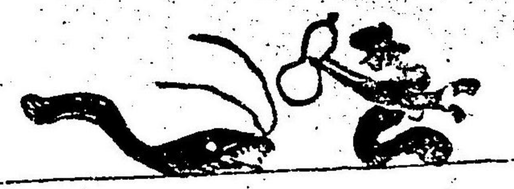
がないやうだねエ　照「イヤ何結構〳〵、御親切に何うも有りがたう……伊「未だ御飯前……早くおしよ、自烈たいね……アノ甘鯛は蒸なほしの方が宜いよ……甘鯛はお前さんが好きだから子、昨夜常磐屋のを買つて來たの、丁度お出でなさるのを虫が知らしたんだよ……蒸して御飯を、トロお食りナ　照「エ、……。」熟々と見ると未だ白粉氣はございません、髮のほつれを疎齒の櫛で搔きあげて島田の少し亂ねた容子、赤ら顔の目元の締ツた工合から、眼もとに愛嬌があッて眉毛がフッサリとして、中肉中身丈のポッチャリとした手、爪先きの可愛らしさ、心嬉しうに照雄の顔を見てニコ〳〵する容子をシゲ〳〵見ると　照「アー此リャ切られられない、何

うも……　伊「何を……　照「止さう　伊「何を止すの　照「エー六間堀の方にしやう……　伊「何うするの……　照「一寸と行ッて來るよ　伊「何うしたんだねエ、御飯をお食りナ　照「直に行ッて來るよ　伊「アラ〳〵ア何うしたの旦那。」トいふのを搆はずに、是れから大橋を渡ッて、西六間堀の秋葉の原の横町へ這入ると、ズウーッと板塀になッてをります、ガラ〳〵ッと潜り戸を開けると、斯う御影の三角石が敷つめてございます、九尺の玄關から見ゐる三疊の處に前立があッて、九尺四枚の襖が紺城で建ッてゐる　照「誰れもゐないかッしやいましたよ殿様が……　照「殿様〳〵といふのは可ませんね　嬢「

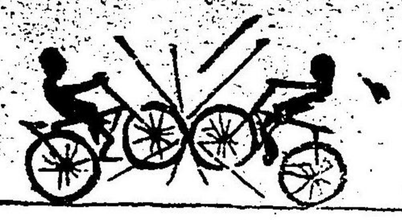


お上りあそばせ　照「奥にゐるのか。」流石に飛び出したいばかりですが、旦那がお出でなすッたといふと、直に自分の北粧の室へ行ッて、鏡臺に向ひ鬢の外れを搔き上げまして、急に少しお顔をなほして、此れからお召替になッて出て來るまでには、お仲といふ女中が、胴間の充分とした綿子の坐布團が据りまして、蠟色の烟草入に天額張の火鉢がなほります、後ろを見ると軸物が一幅かゝッて、古銅の花瓶に梅が挿けてあるといふ、何處ともなしに昔し風の殿様然とした心持ちがして坐ッてゐると、丸髷は丸髷だけれど未だ年は貳十貳といふ、クッキリと色が白く、襟あしが立ッて目もとに愛嬌があッて口もとが甚小で、何處となく氣高くして、裾さばきを適

禮で、スラリ〳〵と出て參りまして、最とも柔しき兩手をついたが、是れが小笠原流のお仕込でございます　嬢「御機嫌よろしう。」ト昔しの殿樣扱かひの通りに　嬢「能く入らッしやいました……　照「ヘイナニ餘り能くも來ません　嬢「アノ一昨日、一寸とお出でがありまして、直にお歸りあそばした時に仲が心配して、二言三言御意あそばしてお歸り遊ばしたが、何か御立腹でも遊ばしはせんかと、種々心配してをりました……能くお出で上さいました今晩は御緩りとお泊りあそばして　照「泊ッても宜うがすが……種々話しがあるんでやすが、少し仲を省いて貰はなければ成りませんて……　嬢「仲、何か仰シャることがあるから、少し此方へ來おいやら

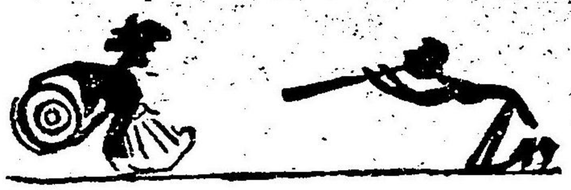


に……一寸と其の包みを待ッてお出で……。」壁紙を取り寄せまして　嬢「アノ貴君、御存じで入らッしやいましたらう、亡夫が大切にしてゐた……此れぱかりは最う滅多にないからといふ羽織がございましたらう、愼德院樣がお着換の御陣羽織、彼の更紗が殘ッてをりますのを、羽織の裏にしたのがあります……給でございますから綿を入れて上げたいと存じまして妾しが出來ない手で漸〳〵にネ、昨夜まで要ッて縫ひあげましたが、召して御覽なさい、常にお召しなさるのはお厭忌でございませうが……最う此れは古着商でさへ、外に仕方がございませんが、德川樣の御紋がついてをりますけれども、一寸いと廣袖とやら言ひまして、只今此んなものを着てゐ



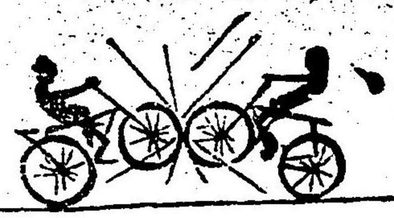
るものが有ると言ひますから、アノ拵らへておきました、眞の御寢になる時だけお召しなさるやうに……夫れに此んな平紬は、小倉だの博多だのは可ないから此方が卷帶には宜しからうッて、眞に貴君は、ヘコ帶とか何とかはお嫌ひでございますから、少し巾を狹くいたして、繻珍の何がありましたから……一寸と此のた羽織を……セメテ亡夫の遺物と思し召して、お出での時だけお召しなすッて……

……是リアヤ何うも、一寸と浪花町へ往ッて來ます　嬢「アラマア一寸と……　照「ナニ一寸と、浪花町へ往ッて來ますよ。」又た拔け出しまして大橋を渡り、小伊代の家へ取ッて返しまして格子戸をガラリ　照「今歸ッた



よ　伊「オヤマア何だらうネ吃驚りしたよ、默止ッてお上んなさりヤア宜いに……何うしたッて彼んなに急にお歸んなすッたの……マア此方へお出でなさいナ……チョイと早くお膳を持ッといで　照「ヤ御飯は食べない……何うも胸に痞へて物が食べられない……時にネ眞實に言ひにくい話したが手、何うも僕の身の上について舊知己が種々と心痛してくれるので、僕が後來のところを思ッて見れば、今爰でもッてお前とは深い中だが、斷然契を斷んけリヤア成りませんよ、然うせんりけヤア、人の信用と言ふ者もあるもんだから、今貴君は取り外しては成らんからと言はれたが、何うもネ……然ういふ義理合なれば、後ちに貴君の身が立ッてから、何んなにと

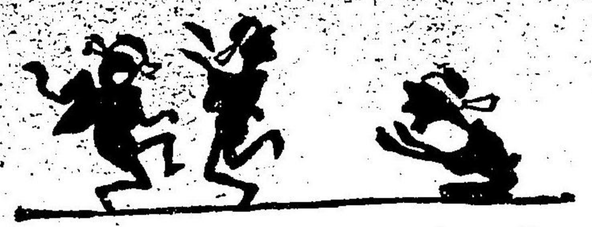
小伊代に情を盡せるヂャアないかと、斯う言はれて見ると至極當然のことで……お前とは種々事情があるんだから、眞實に言ひ兼ねたんだがネ……何うか僕を止して貰ひたい、正れッきり來ないといふことに定て貰ひたい、エ……エ　伊「夫りャア然うでございませう。」ト下を向いて暫らく考がへてゐるうちに顏色が變つて來ました、何も言はず繻袢の袖で涙を拭て、顏を横にして物を言ひませんから　照「泣いチャア可ねエ、泣チャア話しが分らねエ……僕の身を立てさせやうと思ふなら、此處で一つ思ひきッてお呉れナ……然うせんけりャア、種々其の身の立んことがあるのだから……身が立ッてしまッた以上は、何でも夫れは相談に成りませうて……　伊「



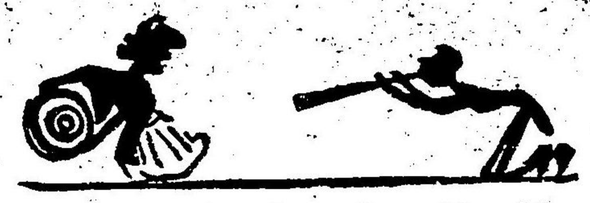
ハイ、何うせ妾のやうな者が附いてゐるから、お前さんの身の上のお邪魔になるやうなことで……出世の妨げをしチャア惡い……妾は止しますよ、照「眞實に止してくれるのか　伊「ハイ止しませう、默止ッて止します……妾が斯うしてゐるばかりで……マア藝妓なんてへ者は、身上の惡い者だとか、堅氣の情はないの……お客を欺すとか何んとか惡い人のやうに思ッてゐますから、小伊代が附いてゐて貴君の御出世のお邪魔になるやうでは宜しうございます、斷然止しませう　照「アー斷念て子……ナニ芝の穀新なんぞはお前に惚れきッてゐるんだから、落籍せやうかといふやうな一寸話しが有ッたんだネ、万清が話しをしたことが有るヂャアないか……夫れ

に此の間だ福井から來たお客も大層惚れさッてゐるててから、早く身を堅めて權妻でも宜いから、家を別に持たして呉れるやうな處があッたら……先方には奥さまもあるだらうけれども、仇に思ッチャア可ませんよ、奥さまの大切の者をお前が取ッたやうなものだから、奥さまに從がッてゐりャア、世間に人鬼は無いから奥様だッて悪くするわけはない……何でも權妻ぶッチャア往ないよ、而して和女が身を立ることをすりャア心懸けある人なれば、年が違ふから何日までも權妻にして、二軒家を持たしておく譯にはといふので、實家になッて何處へか縁づけてくれるやうなことになれば……隨分然ういふものもあるからね　伊「御親切に有りがたう……妾は親

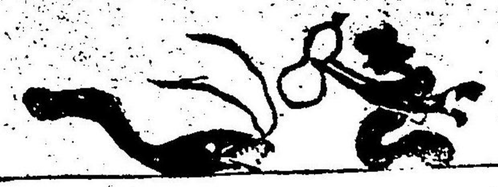
戚も兄弟も何もないのだから、斯うやッて毎晩辛いお座敷へ出て……今の藝妓衆は若い時分から、藝の方は其ッち退けにして、お客が何とか言へば待合へでも連れて行くやうな妓ばかり多い中で、妾ばかりは人が何とか言ッても默正ッて坐ッてゐるもんだから、此んな開けない藝妓はないッて、お客に置いて行かれるやうな不粹者……今さら、お客を取ッて苦勞したり人の權妻などになッて何しに苦勞を致しませう……人の權妻や何かになッて暮すやうな、其んな妾は……何ぼ何でも其んな心ヂャアありません……他に親戚もありませんけれども、お前さんに話した上州の桐生の傍の彼の何とか言ッた子……オヽ夫れ大前てへところは其處に叔母さんがある、其



の叔母さんを頼ッて行ッて、妾は叔母さんの傍で一生涯……然うして叔母さんの死水も取りたいしするから、寧そ機織女になッて、今までの絹布いものを捨てゝしまふつもり……高機てへものは直に覚にられるッて言ひますから、此れを織り習ッて、然うして妾は漸と食べ生涯嬉で暮します……貴君のお世話に成りません……其の代りに照雄さん、何うも澤山送るわけには行きませんけれども、年に二度づゝお前さんに似合さうな縞を叔母さんに聞て……機を覚にれば屹と妾が織ッてお前さんに送るから、其の時はお前さんお否やでも、夏の物と冬の物とは妾が織ッたのだから着て下さい……ネエ照雄さん　照「エー何うも此れは止せない此れは……一寸いと



僕は行ッて來るよ……　伊「何處へ……　照「腹ア立ッチャア可ない戯談だよ……お前の氣を引かうと思ッて言ッたんだ……實はお前の方で断りたがッてゐるだらうと思ッたからで……僕はチョイと六間堀へ行ッて來るから。」ト又た出かける、大橋を渡ッて　照「今歸ッて來たよ　仲「オヤお歸りあそばし、お嬢さまの御心配は一ト通りヂャアございませんよ……サ此方へ、お居室の方も整然とお掃除が出來ております　嬢「オヤヤー何う遊ばしたのだらうッて、今仲と何方へお出でなすッたんだらうと心配いたして……　照「ナニ今チョッと行ッて來たのでげすがナ、誠とに何うも言ひ悪いがネ……仲、彼方へ行ッておくれよ、何うしてもお前と夫婦にはなれ

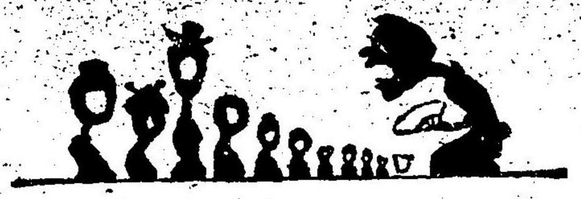


んて……僕も此度遠方へ行てツ身を立てなければ成らんことがあッて……僕のやうな者でも人が信用してくれて、聞きア僕に種々話しをしてくれる者があッて……行けばマア多忙だけれども何が君を官につくやうなことにもして遣らう、門閥家のことだからチ、親父や何かの懇意な人がチ、引立ツて呉れやうといふ、夫れについて和女を連れて行くわけにも可ず、種々事情らあッて、何うしても誠とに言ひにくいけれども、一つ爰は切れて貰はなけリャアならんてねエ……甚はだ何うも申し悪いがチ、何うぞ僕を可哀さうだ出世をさせると思ッて、何うか今までのことは……僕の結んだところは誠とに濟んが、其の話したる人に對しても實に後悔至極の處……昔

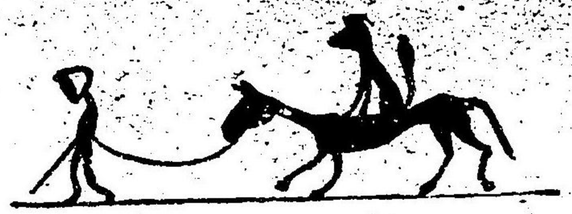
しをいへば切り難いが何うか和女……和女だッて困る身の上ではないから……和女は獨りでゐても年は若いし、僕の出這入をしてゐることが、新聞紙上にでも上るやうな事もあると、世の中へ廣ッまて和女が出世の妨げにもなるから、何うぞ早く何んな者でも養子をして、此の家を相續をしなけりャア成りませんて……解りましたかエ……エ……　嬢「承知いたしました、決して御心配遊ばしますナ　照「承知して呉れましたか　嬢「ハイ、承知いたしましたが、妾しは貴君と違ッて舊弊でございますから貞女両夫に見ねずと、昔しの言葉ばかりヂャアございません、母や父に言ひ聞されてをりました……私しは私しで覺悟があります　照「何う覺悟であります

愛岩山の中へでも……　嬢「屹と斯ういふことを御意遊ばすだらうと、夫ればかりが寝ても覺ても……万一と斯ういふことを仰シャリ出した時は、何うしやうと心配いたしましたが、仲が申すには彼アいふ御氣性で入らしやるゆゑ其んなことを仰シャるお方では無い、平民の方ではなし、お隣家づからで入らツしやッて、元のお武家だもの、一言とお變りなさるもので

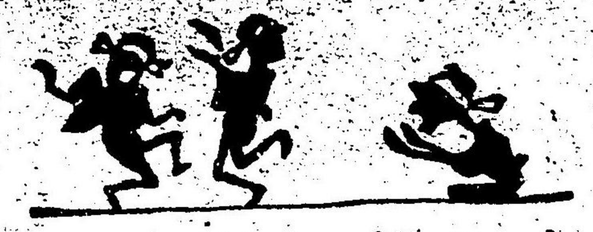
すか。」ト斯う言はれて見ますと、夫れも然うかと存じてをりましたけれども……私しもモウ稚い時分に何うも劍難の相があるといふことを申しした人がございました　照「何ですか劍難の相……　嬢「モウ何も申しません　お歸りあそばせ……モウ貴君のお顔は見ませんから　照「ダガ詰らんことをしチャア可ませんて……何でげす言ッてお呉んなさい　嬢「言ひません　照「何故言ひません　嬢「何故だッても、私しは私しの了簡にいたします……貴君は切れてしまへば他人でございますから、私しの身の上が何うならうとも、何も貴君に御苦勞をかけることは有りませんから、只だ可愛さうだと思し召して下さい　照「ヘエー、此りャア止せない、何うも驚ろいちまッた……ナニ、今のは戯談です決して氣に留めないで、チョッと行ッて來ませう、橘町の半六の家へ行ッて來ます。」ト言ッて歸ッて來た　半「オヤ何うもお早う……何うも感服した、思ひ切ッて來るところは實に大層い……美人をバッサリと斷縁て來るてへのは、苦勞なすッたところだ思ひ



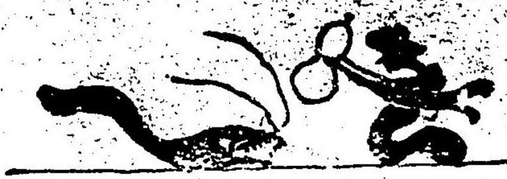
切りが言ひッて今褒てゐたところ……何方を切りやした　照「何方も切れない　半「エッ……　照「何方も切れない切れずじまひでげす、大邊な情でげすからねエ……何うも方々は自殺でもしやうといふ變なことを言ひます、一方は機織女といふので……何うも困ッたネ變も可ないヲ、實にどうも口で云つたつていけない　半「何う遊はす氣で……　照「何う遊ばすッて、無論何方か切らなければ成らないが、何うも人命に障るやうなことになッては、僕も相濟まんからヲ　半「色男に焦れ死にの戀病ひかアハ……此りャア有りがたい仕合せだ、後で御馳走に成りますからヲ……　照「何うも切れませんて、迂濶言ひ出すと可ないから、マア嘘言だといふやうな



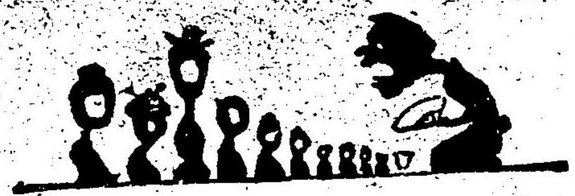
事を言ッて來たがヲ、誠に困る……六間堀の方にも戯談に言ッた趣きにして來たから、會なくッても指輪か何かやれば宜しいが……何うか一方を切らなくッチャア仕方がないが　仙「ヂャア何になさいましよ、お饅頭の餡を嘗めで是れを二つに合せて、蒸し釜で蒸して、中へ貴君が口を附けたのを、知れないやうにして夫れを食べざせると屹と切れますとヲ　照「呪は可ません、外に何か……　仙「ヂャア貴君縁切板を……　照「止しなさいナ馬鹿〳〵しい、今は有りャアしません燒けてしまッて……　仙「アレサ、燒てしまつても、未だ根林が殘つてゐますつて……デスカラ幾らも……御酒の子何うしても止まない、酒亂になるといふ人が、お酒と人間の緣



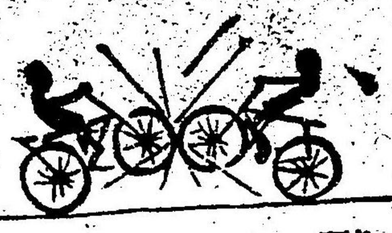
を切らせると言つて、其の株を削つて來て飲ませたら、お酒が嫌ひになりましたよ……夫ればかりでなく、何うしても此の人が着付いて丶は可ないと忽へば、男同士の縁も切れるつてくらゐなれば、不思議ですよ彼れは……削つて持して置ても良いッてへくらゐ……デスカラ彼れに入らッしやいましよ　照「効驗はしますまいがな、昔しの習慣でいふので、其んなことは道理上において無いことだから　仙「道理だッて貴君、其んなことは詰らないといふが効驗ますよ、屹と効驗ます……お灸でも何でも分ります、行ッて御覽なさいよ、旨いと愚ることが有ります、私どもが、試して幾人もありますよ　照「誰人が……　仙「ソレ小常さんと木兵衛さんとねエ、思



ひ合ッてる中が切れたのを御覽なさいナ……彼れは縁切榎ですよ　照「然うかのウ……。」怜悧な人だが困ッたところから、フラ〳〵と馬鹿になるといふ、思案の外でございますから、万一としたらばと迷ひが起ッて、夫れから腕車に乘つて、板橋の縁切榎は燒けてしまつて、其の株が殘つてをります、向ふに掛茶屋があります、自分ながら削りにくいから其の茶見世へ這入つて　照「お茶を一杯おくれ　婆「此方へお掛けなさいまし　照「チョイと婆さん、お茶は何うでも、チョイと聞くが向ふにあるのが縁切榎てへのか　婆「ハイ　照「彼れは有効かへ　婆「大變に何うも有効ことは不思議でございますよ……お行者が入らしつて、皮の中へお行をなすつて、

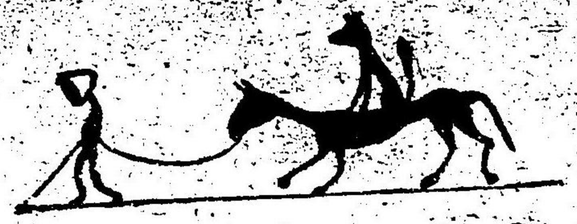


今度また縁切榎の御出來といふ者が出來ましたよ　照「少し削つてくれませんか　婆「貴君、誰人をお切んなさるの……　照「ナニ平常吠たり嚙ついたりする洋犬があるから、其の洋犬を……　婆「マア洋犬を貴君……、照「マア〜、宜いよ、削つておくれ、削賃を上げらア　婆「有りがたうございます、澤山にお茶代を有りがたうございます。」頓て婆さんが削つて參りました、排斥ながらも万一と有効かと紙に包んでゐると、ガラ〜と二人乘りが參りました、とラリと先きへ下りました女は、お高僧頭巾を斯う取りますと浪花町の小伊代、續いて下りましたのはデップリと肥滿た女です　女「姐さん此處にお出でなさい、妾しがチョッくら削つて參ります



から……茶汲婆さん一寸いと爰へお茶を上げとくよ　婆「ハイ……入らつしやいまし、お掛けなさいまし、只今お茶を……　伊「ヂャア彼の後生お願ひだから、有効さうな處を澤山削つて來てたくれ、お願ひだから。」ズッと腰を掛けると照雄と並んだ　伊「オヤ旦那、此リヤア……　照「オヤ何うして來た　伊「貴君何うして此處に……アラ何うも何ですチ　照「何だお前何うして來た　伊「何うしたつてマア何うも、大變なとこでた目にかゝつてしまつたこと……お前さんは何處へ行つたの　照「僕は一寸ご存知己が今日越後へ旅立といふので……　伊「歩行いて　照「アー運動しながら行くてへので、此處で送別したのだ　照「然う　伊「お前は今榎の有効

のを澤山と言つて取りにやりましたナ……ヤア解りました〳〵、分りましたとも、お前と僕と縁を切るつもりで來たんだらふナ……返答は出來まいナ。」ト言ふと向ふからガラ〳〵と合乘で又たやつて來て、ヒラリと下りて　嬢「アー伴や、お前削つて來ておくれ、妾シャ削るのは間が惡い、又た削れもしないから、お茶屋に待つてゐるから……ヨ。」お嬢さんが腰をかけると　照「オヤ六間堀のお嬢さん　嬢「オヤ……アラ貴君お揃ひで何うも　照「エー……三人寄つたが……一躰何にしに來たの　嬢「アラヤア申し譯がない　照「ヂャアお前も何か……縁切り榎か　嬢「イエ〳〵然うヂャア有りません。」心の中で照雄は喜こんだ、有りがたい榎を削りに



來たんだ、小伊代の方では僕とお嬢に飲まして、縁を切らして面して自分の亭主にしやうといふので、此處まで遁〳〵來てくれたが……アー此りヤア切れられない……ト言ッて又たお嬢の方では僕を亭主にしやう、小伊代との縁を切らふといふ心で、此處で落合つたのだらう。」ト斯う思つたから照「モウ何にも言ひません、兩方ともに見捨てはしません……嬢は小伊代と手を切つて而して僕を亭主にしやうといふ……和女は又たお嬢の手を切つておいて、而して僕を亭主にしやうといふ、其の親切は忘れません……然うたらう……ネ　嬢「否へ〳〵然やうではございません　照「ヘエー然うでなくつて、縁切榎を何うしやうといふのだ。」お嬢と小伊代と一緒に、

兩人「ナニ貴君と縁が切りたいから……。」

躰内旅行

故人　三遊亭圓遊口演

扨て此度は躰内旅行といふ滑稽を甚だ短うは御坐いますが一席お邪魔を致しまするで御坐いますエー……一日増しに東洋の文明は漸次に進んで來る事は外國人は實に驚いて居るのを英國のフレデリー……新聞と云ふのに書いて有つたそうで御坐います變挺な新聞で御坐いまして私にも判然はりませんが斯う云ふ英語は一度限りで止す方が宜う御坐います速記者先生の方でも困る事で御坐います……實に其内にも戰爭後日本の人民は酷く又進で

何事も活發に遣るのですが明治廿二三年頃は兵隊に當りますのを嫌がつて陸海軍の法律も知ら無いで何うも兵士に當るのは嫌だと言ふて八王子の方へ逃げて丸燒になるのも知らず駈け出した男が御坐いましたが此頃は進んで軍人になり度いと云ふ樣な風になりました尤も外の事は能く存じません から知りませんが我國は五千萬と云ふ人で御坐いますが女も男の樣に軍人の樣な心持ちして居りますそうで有りますから一朝事が起つたらお娘子でもお握飯位ゐ握つて持て行きながら途中で少しは食し上りませうがたしかに戰地へ持て行きます　娘「私も食るけれども夫れでもお手傳を仕樣……と云ふ位な御決心有るので御坐いますから誠に何うも我國の是れが何うも

幸福で御坐います樣な譯で……何でも其チョイ〳〵生れる子供が壯年になる方が早くなつて彼所の坊ちやんは抱れて居らしつたと思ひますとモー！…散髮になつて佛蘭西刈のお頭でヘエ……何うもお身大きくなつてモー！…頭は白髮になつたと云ふ事見る〳〵中でも有りませんが然う云ふ樣な心持ちがします夫れで御坐いますから何學問の博士と云ふ樣な此方が何うも實に追々に是れからお出來遊ばすと云ふ樣な譯で御坐います誠に此上も無き結構な事で御坐います御朋友同士でお中をよく一口召し上つて居らつしやるは他から見ても實に宜いものです　甲「イヤ……君と僕とは極好い交情で牛鍋を跌座搔いて食ふのだが君は何うも實に發明だね　乙「冗談言つ